〈共同研究報告〉

『太陽』における金子筑水の〈新理想主義〉

——ドイツ思想・文化受容と近代日本精神論

林　正子

はじめに

明治二八（一八九五）年一月から昭和三（一九二八）年二月にかけて発行された明治・大正期の代表的総合雑誌『太陽』（博文館）の時代区分について、鹿野政直「『太陽』——主として明治期における——」[1]は、

（一）第一次立憲主義的論調の時代
（一八九五～一八九七年ころ）
（二）帝国主義的論調の時代
（一八九七～一九〇二年ころ）
（三）自然主義的論調の時代
（一九〇二～一九一〇年ころ）
（四）第二次立憲主義的論調の時代
（一九一〇～一九一七年ころ）
（五）諸思潮混載の時代
（一九一七～一九二八年）

という仮説を挙げ、鈴木正節『博文館「太陽」の研究』[2]は、『太陽』の初期執筆者陣を、

（1）博文館員（記者）または過去に館員だった者
（2）硯友社グループ
（3）早稲田大学（東京専門学校）関係者
（4）『帝國文學』グループ
（5）以上に属さない知名士

と分類し、歴代の主筆とその在任期間については、

①坪谷善四郎［水哉］
……明28・1～30・5
②高山林次郎［樗牛］
……明30・6～35・12
③鳥谷部銑太郎［春汀］
……明36・1～42・1
④浮田和民
……明42・2～大6・5
⑤朝田彦一［江村］
……大6・6～12・9
⑥長谷川誠也［天渓］
……大12・10～昭2・3
⑦平林初之輔

……昭2・4〜3・2

と列挙している。

〈主幹の交替〉と〈展開される思想内容〉[3]とを考慮してなされた鹿野による時代区分は、個別には今後の修正が俟たれるものの、三十三年間にわたる総合雑誌『太陽』の論調を考究するに際しては、便宜的な有効性を発揮していると考えられる。

本稿では、鹿野政直の仮説と鈴木正節の分類における時代区分のうち、**〈自然主義的論調の時代〉**と**〈第二次立憲主義的論調の時代〉**——**鳥谷部春汀**（一八六五〜一九〇八）と**浮田和民**（一八五九〜一九四六）の主筆期に対応する時期の『太陽』に表現された思潮、とりわけ**筑水・金子馬治**（一八七〇〜一九三七）が文芸時評欄担当期に集中的に展開した**〈新理想主義〉**の具体的内容、すなわち時代状況との関わりにおける筑水の**〈新理想主義〉**展開の諸相について考察してゆきたい。この時期の『太陽』の論調の一端を確認すると同時に、併せて、時代精神の洞察者・解読者・提言者である文芸思想家としての金子筑水の再評価を促すことをめざしている。

一、〈自然主義的論調の時代〉と〈第二次立憲主義的論調の時代〉の『太陽』

鳥谷部春汀が主筆を務めた〈自然主義的論調の時代〉は、高山樗牛（一八七一〜一九〇二）の死によって、文芸欄担当が桂月・大町芳衛（一八六九〜一九二五）に引き継がれ、さらに天渓・長谷川誠也（一八七六〜一九四〇）へと移行することで、その戦闘的論説が自然主義文学の展開に多大の役割を演じることになった時期である。

春汀は青森出身、明治二四（一八九一）年に東京専門学校政治科を卒業後、帰省して政治運動をしていたところ、青森遊説中の島田三郎（一八五二〜一九二三）に見出され、翌明治二五（一八九二）年に上京して毎日新聞社に入社。その後、近衛篤麿（一八六三〜一九〇四）の主宰する雑誌『精神』（後、『明治評論』と改題）の編集にも関わり、明治三〇（一八九七）年に博文館に入館。人物月旦欄を担当して、翌明治三一（一八九八）年には『明治人物評論』（博文館）を刊行する。既に挙げたように、明治三六（一九〇三）年に『太陽』主筆となるが、明治四一（一九〇八）年一二月の死去で、その主筆の座は浮田和民が引き継ぐこととなる。

一方、明治三〇（一八九七）年、東京専門学校を卒業して博文館に入社した天渓は、明治三九（一九〇六）年三月の桂月の博文館退館後、文芸欄を担当。当初は樗牛を批判して科学・理性の重要性を説いていたが、やがて科学主義・理性主義への懐疑を示し、ありのままの現実をとらえる〈無思想〉〈無解決〉の態度を標榜することになる。鈴木正節によれば、天渓のその態度は**〈日露戦争後の非国家主義的思潮の先駆**ともいうべき意味をもち、当時樗牛や桂月らの『帝國文學』系評論になじんでいた人々の頭脳に強烈な衝撃を与えた[4]〉のである。

その天渓が明治四三（一九一〇）年六月、

欧州留学へと旅立ち、後を継いで文芸時評欄を担当することになったのが金子筑水。当時の『太陽』の文芸欄拡充は、〈国家〉に対する〈個人〉の問題のクローズ・アップを志向したものであり、鹿野政直は、**〈『太陽』は、日露戦争を中心とする明治国家の完成期にあって、自然主義という文学上の主張をつうじて、個人の自覚の成長と挫折とを代弁した〉**[5]と指摘している。

この時期の『太陽』の目立った特徴としては、海外内の各新聞・雑誌の論調を集約した「評論之評論」欄（明38＝第一一巻まで）や「思潮」欄（明39＝第一二巻以後）の設置が挙げられ、また、時代状況を映し出す臨時増刊のうち代表的なものとして、「戰後經營」（明39・6　第一二巻第九号）・「外人之日本觀」（明40・11　第一三巻第一五号）・「黄色人之衝突」（明41・2　第一四巻第三号）・「時代之趨勢」（明41・6　第一四巻第九号）・「現代人の代表的人物」（明41・11　第一四巻第一五号）などの企画も看過できないだろう。

一連の増刊号「明治史」が刊行されたのもこの時期で、「議會史」（明37・2　第一〇巻第二号）・「財政史」（明38・2　第一一巻第三号）・「外交史」（明38・11　第一一巻第一五号）・「產業史」（明39・2　第一二巻第三号）・「交通發達史」（明39・11　第一二巻第一五号）・「政黨史」（明40・2　第一三巻第三号）・「文藝史」（明42・2　第一五巻第三号）などが編集・発行されている。

この時代の『太陽』について、また、その論調について、鹿野政直は、**〈一九一〇年長谷川天渓の留学をもって、『太陽』の活動は一つの転機を迎える。それまでの『太陽』は、ならぶものない総合雑誌界の雄であった。あらゆる社会事象・文化思潮をとらえようとし、さながら主義・論策のデパートの観であった。しかしはたして**『太陽』は、不偏不党、真にあらゆる現象を紹介しようとしたのだろうか。**注意ぶかく除かれ無視されていた思想が二つあった。一つは社会主義であり、他はキリスト教の思想である〉**[6]と指摘し、〈そのことは、『太陽』の思想があくまでも現世主義的であったことを示している。おそらくそれは、**あえて俗物であることをいとわぬ精神**ともいえよう。博文館および『太陽』は、一貫して東京専門学校（早稲田大学）とふかい関係をもっていたが、その関係は、たんに坪谷や高田早苗をつうじる人的関係だけにとどまらず、現世的改良の旗印をかかげる大隈重信の思想ともつうじるものであった〉[7]と論じている。

〈社会主義〉と〈キリスト教〉の思想が〈注意ぶかく除かれ無視されていた〉という点については首肯を保留しなければならないが、この時期の『太陽』が〈現世主義的〉な論調となっているということは肯綮に中っているのではないだろうか。

続く〈第二次立憲主義的論調の時代〉の主筆＝浮田和民は、もともと熊本バンドの一員でクリスチャン。熊本洋学校・同志社英学校で教育を受けた後、明治二五（一八九二）年に渡米、エール大学で政治学を学ぶ。帰国後、東京専門学校・早稲田大学で

西洋史・社会学・政治学を担当、大隈重信（一八三八～一九二二）、半峰・高田早苗（一八六〇～一九三八）に近く、ドイツ国法学の流れを汲んだ当時の東京帝国大学の学者と比べて、リベラルな英米流政治学を代表した人物として知られている。

鳥谷部春汀の死去を受けて博文館に入館した浮田の『太陽』主筆としての編集方針は、〈内部に向つては**立憲思想の普及**を計り、外部に對しては**倫理的帝國主義の實現を期し**〉という「**太陽の讀者に告ぐ**」（明42・1　第一五巻第二号）の言葉に顕著に表現されており、浮田は同年、博文館から『倫理的帝國主義』を刊行している。大正八（一九一九）年に主筆を辞任し退館しているので、年代的にも〈第二次立憲主義的論調の時代〉は浮田によって築き挙げられたと言っても過言ではない。

鈴木正節は、〈**浮田主筆時代、少なくともその前半期は、高山樗牛の活躍した時期について、『太陽』第二の黄金時代**であったといえよう。**毎号巻頭にのる浮田の長文の論説は、一種の権威**をもちはじめ、**日露戦後から大正初期にかけての思想界に、指導的な役割**を果たしたのであった。浮田は、日韓併合、大逆事件、辛亥革命、大正政変、シーメンス事件など、時々の諸事件に、「**立憲主義的帝国主義**」の立場から明解な論断を与え、後の「民本主義」理論家・吉野作造などに大きな影響を与えたのである〉[8]と指摘し、さらに、〈浮田の主筆時代は、一面それ以前にありえなかった問題が続出した時代でもあった。特に明治末期の大逆事件や南北朝正閏論などは、その扱いがはなはだ困難で、『太陽』にあっても、浮田の明解な議論を別にすれば、執筆者間に、相当な差異があらわれた〉[9]と記し、大逆事件関連の記事として、明治四四（一九一一）年二月号＝第一七巻第二号に、浅田江村（一八七四～一九三六）の「逆徒處分の經過を論ず」と平出修（一八七八～一九一四）の「思想發表の自由を論ず」が併載されていることを挙げている。

また、この時期の時代状況を映し出す臨時増刊としては、「一等國」（明43・1　第一六巻第二号）・「日英大博覧會」（明43・6　第一六巻第九号）・「日本民族之膨脹」（明43・11　第一六巻第一五号）・「現代社會觀察」（明44・2　第一七巻第三号）・「列强外交時局」（明44・6　第一七巻第九号）・「戰爭乎平和乎」（明44・11　第一七巻第一五号）・「革命及革命的運動」（明45・2　第一八巻第三号）・「雄飛二十五年」（明45・6　第一八巻第九号）・「明治聖天子」（大元・9　第一八巻第一三号）・「御大葬記念號」（大元・10　第一八巻第一四号）・「大正維新之風雲」（大2・3　第一九巻第四号）・「近時之婦人問題」（大2・6　第一九巻第九号）・「南進乎北進乎」（大2・11　第一九巻第一五号）・「内閣組織と改黨」（大3・6　第二〇巻第八号）などが発行されている。

総合雑誌の雄であった『太陽』が、やがて『中央公論』にその地位を譲ることになったことについて、鹿野政直は、〈**『太陽』衰微の一つの原因**は、大隈が、一九一一年四月『新日本』を発行したことにもとめ

られるが、思想の推移からいえば、**現世主義的態度が魅力を失っていった**点にあると思われる。その結果『中央公論』に凌駕され、浮田和民の退壇ともなった〈[10]〉としている。

また、鈴木正節はこの時期の『太陽』について、〈文学関係は低調で、**長谷川天渓がヨーロッパに留学した（明治43年6月）後に文芸欄を担当した、早大教授金子筑水をはじめ、上田敏（20巻）、木下杢太郎（21巻）などは意欲がなく、かつてのこの欄の元気はみられない**。小説も白鳥・鷗外・花袋などの作品が一・二篇のった程度であって、この時期、文学関係は誌面全体からみても、貧弱な感が強い〈[11]〉と記している。

しかし、この見解については異論があり、以下、明治期の筑水の思想・文芸行路を確認したうえで、〈自然主義的論調の時代〉と〈第二次立憲主義的論調の時代〉の『太陽』に掲載された筑水の論説を検討してゆきたい。この時期の『太陽』に展開された筑水の具体的評論とその業績の意義について、私見では、オイケン（Rudolf Eucken 1846〜1926）らドイツ哲学についての先駆的な紹介、ドイツ自然主義文学論をとおしての日本自然主義文学論の展開、明治・大正期の哲学総括における鳥瞰的な見取り図の提示、時代精神を読み解く〈両性問題〉論・〈生命哲學〉論・〈文化主義〉論の展開などの項目が挙げられるが、これらのうち今回はとくに、自然主義時代における筑水の〈新理想主義〉――ドイツ思想・文化受容と近代日本精神論の具体的内容がうかがえる『太陽』文芸時評欄担当期の前半、すなわち明治四三（一九一〇）年から四五（一九一二）年の論説を主な考察対象としたい。

二、明治期における筑水の思想・文芸行路

（一）東京専門学校修学時代

西田幾多郎（一八七〇〜一九四五）、小波・巌谷季雄（一八七〇〜一九三三）、嶺雲・田岡佐代治（一八七〇〜一九一二）、枯川・堺利彦（一八七〇〜一九三三）、秋骨・戸川明三（一八七〇〜一九三九）――これらの思想家・文学者たちと同年の明治三（一八七〇）年一月一〇日、長野県小県郡殿城村に生まれた筑水は、明治二一（一八八八）年、上京していた父親の急逝のため一家で東京に生活することとなり、同年九月、東京専門学校英語普通科に入学。同級生に、互いに切磋琢磨する関係にあった独歩・国木田哲夫（一八七一〜一九〇八）、紀淑雄（一八七二〜一九三六）、不倒・水谷弓彦（一八五八〜一九四三）、中桐確太郎（一八七二〜一九四四）らがいる。

明治二三（一八九〇）年九月、筑水が東京専門学校文学科第一回生として入学したときの初代文学科長が逍遥・坪内雄蔵（一八五九〜一九三五）、翌明治二四（一八九一）年九月、哲学関係諸学科担当として赴任して来たのが、カント（Immanuel Kant 1724〜1804）の批判的理想主義哲学に造詣の深かった啓蒙思想家＝操山・大西祝（一八六

四〜一九〇〇）である。大西祝はその後明治三一（一八九八）年まで、東京専門学校で哲学・心理学・論理学・倫理学・美学などの講義を担当。すなわち、筑水の思想・文芸観の形成上、逍遥、操山――このふたりの師からの影響が甚大であったことが推測され、実際にその軌跡をたどることができる。

明治二四（一八九一）年一〇月から翌年三月下旬までの毎週水曜日、「同志讀書會」を水谷不倒宅で開催し、同級生たちとエマーソン（Ralph Waldo Emerson 1803〜1882）の『偉人傳』を輪読、カーライル（Thomas Carlyle 1795〜1881）・ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe 1749〜1832）論などを展開したことも、筑水の文芸・美学論の基盤として見逃せない。

明治二六（一八九三）年七月、筑水は文学科を優等で卒業。卒業論文「詩才論」は、逍遥らから非常に高い評価を得て、『早稲田文學』（明26・7・10〜8・25）に掲載され、同年九月から明治二九（一八九六）年まで、筑水は文学科講師として英語を担当することになる。また、中桐確太郎、抱月・島村滝太郎（一八七一〜一九一八）、朝河貫一（一八七三〜一九四八）、中島半次郎（一八七一〜一九二六）らとともに、毎月一回の「哲學會」を自宅で開催したのも、この年＝明治二六年一〇月以降のことである。

明治二九（一八九六）年四月からは、創設された早稲田中学で英語と倫理を担当し、東京専門学校では教育学を講義、明治三一（一八九八）年に文学部講師となり、引き続き早稲田の教壇に立っている。このように、文芸思想家・筑水は、教育者としての実践活動にも携わり、後年には大学行政の要職にもついて、早稲田大学文学部哲学科の創設精神を体現化した存在であったと言えるのである。

（二）『早稲田文學』における活躍――〈新理想主義〉の萌芽

筑水が在学中の明治二四（一八九一）年一〇月、東京専門学校文学科機関誌として逍遥を中心に創刊された『早稲田文學』では、編集補助として力量を発揮した筑水を始め、抱月、梁川・綱島栄一郎（一八七三〜一九〇七）、宙外・後藤寅之助（一八六六〜一九三八）らの活躍が目立っているが、後、明治三九（一九〇六）年一月に復刊され、自然主義の牙城として隆盛をきわめる第二次『早稲田文學』（抱月主宰）においても、筑水は、抱月と並んで重要な論説を数多く発表している。

文芸時評欄担当者として『太陽』に執筆する以前、その『早稲田文學』に、〈みすずのや〉〈西蹊生〉〈U・K・生〉などの号を用いてほぼ毎月のように寄稿した論説のうち、筑水の関心の対象を顕著に表わしていると思われるものとして、次の論考・抄訳が挙げられる。

- 「ジオルジ、メレヂスの詩想」（ドーデン著・抄訳　明26・11・27）
- 「ショオペンハウエル」（明26・12・10〜明27・2・25）
- 「傳奇派の名家ロセッチが詩想」（抄

訳　明治26・12・26）
・「カントの美論」（明27・4・10～6・10）
・「美の道德的價値を論じて文學者の責任に及ぶ」（明27・6・29）
・「女流小說家の特義に關する謬見」（グレッグ著・抄訳　同右）
・「新文豪（ホイットマン）」（明27・7・13）
・「新文豪（魯國の新文豪トオストイ）」（明27・7・26～8・10）
・「新文豪　諾威國の新文豪イブセン」（明27・9・10）
・「ギヨオテの性行」（ハットン著・義訳　明27・10・10～11・10）
・「『透谷集』を讀みて」（明27・10・25）
・「『我邦の基督教問題』を讀みて」（明28・1・10）
・「國民文學と世界文學」（明治28・1・25）
・「所謂壯士芝居を觀て」（明28・3・10）
・「フィヒテと普佛戰爭」（明28・3・11）
・「哲學時代　哲學といふ語に就きて」（明28・6・25）
・「ローマン派の世界觀と文學」（明28・7・25～9・25）
・「『近松著作一斑』を讀みて」（明28・10・10）
・「新刊　ヘルバルトに關する攻究」（中島半次郎・著　明29・1・5）
・「所謂社會小說」（明31・2・3）
・「歐洲教育の三大精神」（明31・5・3）
・「歐洲教育壇の二大傾向」（明31・6・3）　など

このうち、カントの『判断力批判』が典拠にされた「カントの美論」は、「カント前の美論の大勢――カント美學の本領――結論」「美の分析」「壯美の分析」「美術論」「賞翫的判斷の辯證――以上の評」の各項目のもとに論じられたもので、〈專門語の不充分なる我が國語〉によって表現する〈難事〉に挑戦した労作。師・大西祝の業績を引き継ぐカント美学の紹介として高く評価されている。

また、ホイットマン（Walt Whitman 1819～1892）の評伝についても、漱石・夏目金之助（一八六七～一九一六）による紹介があるのみの状況において執筆されたものであり、海外文学者紹介「新文豪」シリーズとして、さらにトルストイ（Lev Nikolaevich Tolstoi 1828～1910）、イプセン（Henrik Ibsen 1828～1906）紹介に先鞭をつけている。

「國民文學と世界文學」では、国民文学論議が一挙に高まった日清戦争後の、〈國民文學の大なるものはやがて世界文學〉とし、保守的な国民文学派が〈自國の弱點とする善美と誤認〉して、国民を〈頑迷退守の狀態に陷らしむる〉ことのないようにと警告し、「所謂社會小說」では、〈廣く社會の歴史上、社會主義の現るゝ原因、勞働社會と資本家と爭鬪するに至る所以の動機〉を明確にして、〈讀み行くうちに、社會主義の

起こる動機を讀者に感得〉させなければならない、と論じている。

さらに、明治三三（一九〇〇）年から明治三六（一九〇三）年までのドイツ留学をはさんで、帰国後に『早稲田文學』に寄稿した代表的な論説としては、次のものが挙げられよう。

・「藝術の價値」（明39・3・1）
・「懐疑詩人ニコラウス、レナウ」（明39・7・1）
・「キヤーケゴールドの人生觀」（明39・9・1）
・「宗教的眞理」（明39・11・1）
・「綱島梁川君の批評に答ふ」（明40・1・1）
・「プラグマティズムの要旨及批評」（明41・12・1）など。

これらの論説のうち、「キヤーケゴールドの人生觀」は、従来、上田敏（一八七四～一九一六）によってその一端が紹介されていたに過ぎない、実存哲学の先蹤であるキルケゴール（Sören Kierkegaard 1813～1855）の宗教生活・人生観を論じたもの。〈現代文明に反抗して一種の厭世的宗教を説いた〉点に共感を寄せ、〈詩的天才〉を備えた思想家・宗教家であることにおいて、ショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer 1788～1860）、ニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche 1844～1900）に共通し、〈人格〉においてはトルストイに通じるとしている。

このように、既に『早稲田文學』活躍期の筑水の論考の随所に、後述する明治末年から大正期にかけての『太陽』に展開された彼の〈新理想主義〉の萌芽が見られるのである。

（三）ドイツ留学と帰国後の活躍――〈二十世紀の新理想主義〉論

遡って明治三三（一九〇〇）年九月八日、筑水は、海外留学制度による東京専門学校文学科第一回の留学生（哲学研究）として横浜港を出発。同一〇月二九日にマルセイユに到着し、一一月上旬にハイデルベルク大学に入学する。間もなく神経衰弱気味になるが、意を決して学業を続け、翌明治三四（一九〇一）年三月にはライプチヒ大学に転学する。

ライプチヒでは、師・大西祝も学び自身も心酔していたヴント（Wilhelm Wundt 1832～1920）のもとで、心理学・哲学・論理学を学び、服部宇之吉（一八六七～一九三九）、嘲風・姉崎正治（一八七三～一九四九）らと交友する。

明治三五（一九〇二）年五月、「書信」を『早稲田文學』に寄稿。ヴァーグナー（Wilhelm Richard Wagner 1813～1883）の「タンホイザー」などの楽劇に接して、ドイツ文化と音楽の親密な関係を痛感したこと、ヴント『近世哲學史』、フォルケルト『美論』、フリッカー『法理哲學』『倫理』などを日本に紹介することの必要性を強調している。また、この年夏には、ミュンヘン、ヴァイマールを旅行し、秋からはベルリン大学で学んでいる。

さらに、翌明治三六（一九〇三）年、筑

水は学位論文「ファーガッソンの道徳哲學」(Moralphilosophie Adam Fergusons)をライプチヒ大学に提出して学位を取得。ファーガソン(Adam Ferguson 1723〜1816)は、スコットランド生まれのイギリスの歴史家・道徳哲学者。従軍牧師の後にエジンバラ大学教授となった彼は、懐疑論の立場で経験論を徹底させカントの批判主義に重大な影響を与えたヒューム(David Hume 1711〜1776)、重商主義経済理論の体系化をおこなったスチュアート(James Denham Steuart 1712〜1780)、国富の源泉を労働におき自由競争と資本利潤の追求が社会進歩につながるとしたアダム・スミス(Adam Smith 1723〜1790)らと親交をもち、代表作『市民社会史論』(一七六七)では、人間と社会の相互関係を重視する視点に立って、人間が野蛮な状態から政治的・社会的に洗練されてゆく過程を論じている。また、倫理学の領域では、社会発展の要素として、自由な精神による公平な競争を認め、著書として他に『道徳学と政治学の原理』(一七九二)などがある。

筑水が博士論文の研究対象としてファーガソンを選択した経緯は詳らかでないが、既に日本で師友とともに切磋琢磨していた哲学・倫理学・美学の分野において、とくに道徳哲学への関心をふくらませていたことが、そのテーマに到達した要因であると言ってよいだろう。

同年=明治三六(一九〇三)年、パリ・ロンドン経由で帰途に就いた筑水は、留学中の抱月とロンドンで旧交を温め、翌明治三七(一九〇四)年一月五日、神戸港に到着。帰国後は、引き続き早稲田大学講師として倫理学・心理学を担当し、翌明治三八(一九〇五)年九月、イギリス・ドイツ留学を終えて帰国した抱月とともに、逍遥門下の双璧として早稲田大学文学科発展のために尽力する。

また、明治三九(一九〇六)年一月、『早稲田文學』が復刊され、二月には、抱月、不倒、青々園・伊原敏郎(一八七〇〜一九四一)らとともに発起人幹事となって、「文藝協會」を設立している。

帰国後の筑水の評論は、『早稲田文學』に掲載されたのみならず、『中央公論』にもその代表的論説が発表され、そのなかで「**文藝の將來**」(明39・4)には、〈現實主義や寫實主義や、直接にして眼前なる世態人情の上に、光輝ある理想的生活を建設するをもて其の本來職を忘れて、ひたすらに、唯現代社會の實相のみを赤裸々に暴露せんと力むるに於ては、遂に極端なる現實主義又は極端なる寫實主義の弊に墮せずんばあらず。極端なる現實主義又は寫實主義の弊は、ひとへに現代社會の闇黒面の暴露、就中現代下層社會の爛熟腐敗等あらゆる醜態劣情の赤裸々なる暴露をもて、其の唯一の能事、唯一の本來職となすにあり、人生の光輝ある理想的方面には一切眼を閉して、たゞ社會の闇黒面のみを人生の實相と觀ぜんとするにあり。果然二三十年前の獨逸文壇には、斯かる極端なる現實主義の弊風凄しき勢もて吹きわたりぬ〉と記されており、〈現實主義〉や〈寫實主義〉に対する筑水

のスタンスの取り方と同時に、筑水の唱える〈新理想主義〉の基本内容がうかがえる。

同論にはまた、筑水と重なる時期にドイツに留学していた姉崎嘲風と通うようなニーチェ、ヴァーグナー論が展開され[12]、さらには、〈最近獨逸文壇の趨勢〉として、ドイツ自然主義の代表的作家であるハウプトマン（Gerhart Hauptmann 1862～1946）やズーダーマン（Hermann Sudermann 1857～1928）についても論じられている。筑水によれば、〈ワグナーの神祕的兼感性的戀愛、ニーチェの「ユーバー、メンシュ」、ハウプトマンの標象主義、此等は未だ明確なる理想主義とは謂ふべからざるも、少なくとも、此の方面に轉ぜんとする傾向を示せるもの〉であるというのである。

翻って日本については、〈一面に於て、我が國の現實的傾向は、未だ西洋の其れのごとく激烈ならざるに、早く他の一面に於ては、理想的傾向の次第に高まり來たれるを覺ふるにあらずや、現實的又は物質的なるものよりは、何等か大なるもの、優れたるもの、高きもの、清きものを得んと望みつゝあるにあらずや、而して斯くのごとき理想的傾向がむしろ近時の著き現象ならずや。文壇に於ても既に標象主義の徴候あり。神祕主義の徴候あり、又近時の宗教的自識のごときも、一面より言へば、此の理想的傾向の端緒とも見らるべきにあらずや〉としながらも、それは〈未だ**二十世紀の新理想主義**にはあらざる也〉と述べている。

そして、〈將來の文藝の發展に關する平生の希望〉として論じられたのが、〈二十世紀の新文藝は、須べからく高く**新理想主義**を掲げて、雄大にして富麗なる精神活動を創造すべきなりと。鋭利なる觀察眼もて現代生活の精を發き徴を穿つは固より妨なし、寫實主義又は自然主義に賴りて、人生の弱點汚點等すべて賤劣醜惡なる方面を深刻に描寫し出だすは固より妨なし、されど偉大なる文藝は常に**理想的**（アイデアリスチック）なり、光明に滿てる雄大富麗なる精神活動を創造し出だして、はじめて偉大なる文藝となる、堅固なる現實の土臺の上に、人生の尊嚴（ディグニチー）を發揚すべき高貴なる精神活動を發揮し得て始めて貴むべき文藝となる〉ということである。

〈偉大なる文藝は人生に關して偉大なる教訓を與ふるものに限らる、偉大なる教訓とは、人類の尊嚴を發揚すべき偉大なる精神活動を味はしむるをいふ、偉大なる精神活動は人生に潜在的に含蓄せられたり、之れを開發し之れを發揮するが藝術家の使命なり〉という芸術家観を提示する筑水は、さらに、〈**新理想主義**の傾向を取るにあらずば、如何にして將來の文藝を百花爛漫の境に發達せしむるを得べきぞ、**新理想主義**を取るにあらずば、如何にして將來の我が文藝を他國の文藝に比較して遜色なからしむるを得べきぞ、**新理想主義**を取るにあらずば、將さに大に勃興せんとする國民の文藝を如何にすべきぞ。偉大なる藝術は必や時代精神に先きんじて而して時代精神を率ふ、今や有力なる新代は將さに勃興せんとしつゝあり、將來の藝術にして、此の有力なる新代を統率するの力なくんば、そは二十世紀の藝術にはあらずして、時代に率ゐら

るゝ憐ふべき藝術たるに過ぎざる也〉と、高揚した論調で〈新理想主義〉を標榜している。

このように筑水の芸術観とともに〈新理想主義〉の定義・意義が披瀝された「**文藝の將來**」は、〈偉大なる藝術は偉大なる人格の反映なり、偉大なる人格を離れて、いづこに偉大なる藝術の出現を期すべけん。眞の藝術は眞の薫陶者なり、藝術家の人格先づ偉大にして、始めて眞に世道人心を薫陶するを得べき也〉、〈此の光明主義又は理想主義の傾向のもとに、文藝は初めて偉大なる光輝を人生に放つを得べし、將來の文藝は此の光明主義又は理想主義に賴りて、初めて將來の偉大なる文藝となるを得べき也〉という高唱によって結ばれている。

近代ドイツの文芸思想界の趨勢を述べることで日本文芸の将来を照射しようとする発想は、明治三四（一九〇一）年から翌年にかけての『太陽』に掲載された、樗牛と嘲風の公開往復書簡[13]に既に表現されていたものとも重なるが、筑水の言う〈**新理想主義**〉が文壇における傾向として顕著になるのには、もうしばらくの月日が必要であり、漱石らの登場によって、〈非現實的〉〈非自然主義的〉な文学も生まれつつあった当時の顕著な傾向としては、藤村・島崎春樹（一八七二～一九四三）の『破戒』（明39・3『緑蔭叢書』第一篇）を始めとする自然主義文学作品の発展と隆盛を挙げることができる。

とまれ、翌明治四〇（一九〇七）年に早稲田大学教授となった筑水は、既に記したように、明治四三（一九一〇）年七月、洋行した天渓を引き継いで、『太陽』文芸時評欄担当者として博文館「**入社の辭**」を執筆。大正二（一九一三）年一二月までの三年半の間、『太陽』文芸時評欄を舞台に充実した執筆活動を展開することになる。

（四）〈早稲田派文士〉の活躍と筑水に関する評価

ところで、筑水が『太陽』文芸時評欄担当者になる前後の明治四〇年代には、文壇・論壇ジャーナリズムで東京専門学校＝早稲田大学出身者の活躍が目覚ましく、たとえば『太陽』掲載の記事としては、六人の文人によって〈早稲田派文士〉の活躍が語られた「**早稲田派文士の長短**」（明42・11 第一五巻第一四号）がある。この記事は、「談話」という性質上、それぞれの執筆者の単行本・全集類にも収録されること稀れであるが、当時の早稲田派の文壇における地位・評価、早稲田派のなかでの位置関係、個々の文士の評価といったものが直接的に語られているので、引用が長くなるが、その具体的内容を確認しておきたい。

〈プラグマチズムとナチュラリズムの比較研究〉に関する筑水の講演を聴いた島崎藤村の「**早稲田は批評的**」では、〈早稲田が何ういふ人物を作つたか、または新島氏の同志社や、福澤氏の慶應義塾などに比べて見て、早稲田は何ういふ貢獻を社會に成したか、といふことを思ふと、どうしても私の見方は文學といふ方に偏する〉と語られ、政治・経済・商業・文学・哲学・教育など

の諸方面から検討した〈早稲田の學風〉は〈批評的〉だと指摘されている。

文壇における早稲田派の文士について考えるに先立ち、〈往年の早稲田出身者の殆んどすべてが政治の方面に向つて如何に活躍し飛揚してゐたか〉を思い、〈是を今の早稲田派文士の位置に較べて感ずる點がある〉と始められる戸川秋骨の「**文學的教育の基礎如何**」では、〈新聞の政治記者と言へば、大抵早稲田から供給して全國に行き渡つてゐた。生徒間でもそれぞれ新聞雑誌に據つて熱烈な政論を唱へようとする氣風が動いて、その間に漲つた進歩黨の勢力といふものは素晴しい盛況を呈してゐた〉、しかし〈賑やかで華やかではあつたが、一面根柢のない立場の淺いやうなところがあつた。それが丁度今の早稲田を出て文壇に擴つてゐる文士の全體に當て箝めていふ事が出來る〉とされている。

さらに秋骨は、〈文士を輩出するところの早稲田文科の教育の方法に、堅實といふ點が缺けてゐる〉、〈着實に思想の涵養を助けるとか、語學を修練させるとかいふ事が足りない〉、〈何うかして根柢の養育に重を置くやうな教育のしかたが望ましい〉と重ねた後、〈形が出來すぎてゐる、早熟した氣味があるのだ帝大文科出の通弊である如何にも遲鈍臭い少しもハキハキしたところのないのに較べると、何にでも間に合うものの書けるといふ事は或は長所であるかも知らぬ〉、〈評論に於て自分が感ずるのは、新しい海外の思潮なり、自分の考へなりを論理的に究めて行つて、人々に納得させるといふところだ。中には島村氏の説はロジカルに過ぎるとか、何とか言つていろいろに異議を樹てる人があるやうだが、島村氏なり長谷川氏なりの議論には、矢張りしつかりした、えらい所があるのだ〉と、〈早稲田派文士の長短〉を述べ、〈文學の教育のしかたに今少し骨を折つて貰ひたい〉と、要望の言葉で結んでいる。

また、柳浪・廣津直人（一八六一～一九二八）の「**現在の勢力を保ち得るか**」は、冒頭、早稲田派の人々の文壇への〈貢献〉という観点から、〈今のところ正宗君を除いては、その作物が文壇の趨勢に差響くといふやうなものを、書かれる人はないやうだ〉としたうえで、〈他の人々の作物、それは餘りに薄ッぺらな如何にも西洋臭い短篇ばかりである〉、〈例へば露西亞の作物に現はれた、暗い空氣であるとか、陰氣な人間の性格とか、荒涼とした自然とかいふものを、何等の用意がなくて突如日本に持つて來ようとする事だ。だから、日本人の書いた小説としては何うも生煮えに思へる〉、〈よく自分に熟しない西洋の思想を日本の人情や風俗や國勢などを呑込まないで、直ちに取入ようとした結果だと思ふ。早稲田派の作家には恁うした傾きがあるやうで、その書かれるものが何うも西洋臭い〉と批判している。

さらに、柳浪は、〈早稲田派が文壇に勢力を得てから、小説の書方がずつと變つた〉、〈此頃は作者の個性が出なければならないと言はれて、作物に自分を出さうとする傾向があるが、私などのとは行方が違つ

てゐる。書方の新しくなつた事には早稲田派の功が多いが、その取材が面白くないと思ふ。自然派の惡い方面、肉慾の描寫などが平氣で書かれてゐる。小説の讀者と言へば大抵學生だ、さういふ事は讀者に影響を與へるところが尠くないから、成だけ避けたいといふのが私の主張だが、併し取扱ふ態度さへ眞面目なら可いと思ふ〉というような、早稲田派批判をしながらも、自らの執筆対象を想起してか煮え切らない表現も並んでいる。

柳浪のこの談話には、続けて筑水についての評言も登場。**〈評論では金子筑水氏が好だ。「中央公論」に懷疑に就いての論文**が出てゐたが、**全く懷疑の生ずると共に、自分の生きて行く上に、その生に當て箝つた途を取らなければならない**、とあの説に關して私は思つた。**懷疑の儘で生きる事は出來ないといふやうな意見に面白い處**があつた。**早稲田派の評家では餘程頭腦の明晰な人**と思はれる〉というものである。

ちなみに、『中央公論』掲載の筑水の懷疑論というのは、時期的、内容的にみて「懷疑と努力」（明42・10）であると考えられるが、この論文では、人生が疑問と不可思議に満ち満ちているかぎり、〈懷疑〉は避けがたい運命であり、永遠にかわらない〈人生觀〉を建設しなければならないという主張が展開され、〈懷疑〉の哲学者・筑水の思想が披瀝されていると言える。

また、この柳浪の談話には、当時の文壇の位置関係も垣間見えて興味深い。〈よく早稲田派の人から當時の硯友社は、それぞれに先生ぶつて傲慢に構へてゐたなどと、私などには迷惑な事を書かれるやうだ。決して吾々は先生ぶつてた事もなく、傲慢に構へた覺へもない。一體硯友社には評論の筆を執る人は一人もなかつたので、銘々に創作の一方で力めてゐた。それが時勢に適したところから、世間からの受が好かつたといふまでで、私達で威張るやうな事はなかつた〉というようなものである。

そして、柳浪は、早稲田派の〈尠からぬ効果〉を認めるが、〈それは主に新聞雜誌に據つてゐて、文壇に向つて怒號するに便宜な位置でお互の作物の批評をしたりするから一面から言へば賑やかなのである。帝國大學の出身者は學校を出ると直き、教師とか會社員とかに口があつて、靜かに一身が片付いて了ふが、早稲田を出た人は多くが新聞雜誌に據る、そして團結した勢力を文壇に擴げて行く。併し、此頃赤門派の文士に獨立して起つやうな人が更に更に多くなると、實際の腕較べになつて、早稲田派が今の儘の勢力を持續する事が出來るか、そは遽かに斷言する事が出來ない〉と結んでいる。

続く「**建設には力が足りない**」と題する小林愛雄の談話には、六人のなかで最も具体的な見解が示されている。〈その日その場合に見た事、思つた事、又は小耳にでも挾んだやうな事を、直き筆に上して書くといふのは、一斑の低い文藝から言つて一時的に歡迎されるのが當然である。私は早稲田派文士の中に、恁ういふ傾向の多いのを慊らず思つてゐる一人だが、これは新聞雜

誌文明の及ぼし勝な弊だと思ふ〉と始められ、続けて、〈一體近代の文學は西洋でも日本でも青年といふ事を離れない、言はゞ青年文學といふ傾きがあるが、近頃は殊に甚しい早稲田派の文學を引ッ括めて、その青年文學中の青年文學といふ風にも考へられる。否少年文學とも思はれる。併し一面からいふと、兎に角從來の一方に偏した思潮を、凝固の出來た文壇を破壊したといふ事に與つて力のあるのは事實だ。その以前、高山樗牛氏あたりにも此の機運は既に少しづゝ動いてゐたが、最近に於て、惰眠を貪つてのみゐた舊い文學を破壊する事に努めたのは否まれない事實で、破壊といふその事だけの功績は擧つた〉とする。

しかし小林愛雄の主張は、〈今は最早長く破壊の道程のあるべき時期ではなく、〈破壊の次に當然起つてくるところの、新文藝の建設といふ事に對しては、今の早稲田派の文士には未だ力が足りない〉、〈自然主義といつても眞の自然主義の作品はこれからであらう〉ということであり、〈人生の看方とか學問としての研究とかを今數歩進めて、何か目覺しい文藝の建設〉の必要性を説く。

さらに畳みかけるように小林が強調するのは、〈今少し深い人生の看方が望ましい。箱根に行けば直ぐに何の雑作もなく箱根を書くといふやうな、さうした手ッ取早いジャアナリズムは印象主義などと號して喜ぶ人もあるが、私はあまり値打があらうとは思はない。自個の破壊した跡に眞の文學を建設しやうとする努力には、學問としての研究と事々物々に對する洞察の力とを併せねばならない。今の早稲田派の人々の行方には未だそれだけの用意が足りないやうだ〉ということ。

続けて、〈自然主義の起こらなかつたロマンチックの時代には文壇に大分ハイ子とかニイチェとかいふ聲が聞えて、それが暫く動かなかつた。早稲田派の人々はその後の單調を破つた功績はある、が、現在のところ破壊の跡何物もないといふ、燒跡のやうな矢張り一種の單調な凡人時代に陥つた形である。凡人時代——文學は廣まつたかも知れぬが、それと共に作家も讀者もクリティックも凡て程度が下つた、此の凡人時代となつたのだ。かうして生れた自然主義から手ッ取早い、手輕な文學が生れるのは當然で、一寸は歡迎される事もあらう。が、長く續くものではない。天才が現はれたらキット變ると思ふ〉というように、凡人時代を批判すると同時に、希望的観測も記されている。

さらに小林は、〈早稲田派の人々が新しい方面へ、方面へと盲進した結果は、クラシックスの研究といふ事が甚しく缺げてゐる。希臘の古いドラマの中にも今の自然主義以上に新しい點がある。ツルゲーネフ、アナトール・フランス等に大分深さうな研究が見えるやうだが、同時にクラシックスも忽かにすべきではない〉と主張し、抱月、天弦・片上伸（一八八四～一九二八）、宙外、白鳥・正宗忠夫（一八七九～一九六二）らの例を挙げて、〈早稲田派文士の長短〉を論じている。

また、紅葉・尾崎徳太郎（一八六七～一九〇三）門下の春葉・柳川専之（一八七七～一九一八）は、「**團結の强き早稲田派**」において、〈早稲田老伯を中心にした憲政本黨が多年逆境に立つてゐる事と、文壇に於いて占め得た勢力の偉大な事とを比較すると、中々面白い對照だ〉として、〈早稲田派文士〉をさらに〈赤門派〉と比較する。〈高等の學府として、帝國大學があり、私立でも當の敵の慶應義塾があつて、かうして鼎立した中に、その勢力を早稲田が容易に贏ち得たといふ事を考へると、慶應は文學の方面には全く意を用ひてゐない、と言つて可いのでやり方がすべて實用的だ。で、これは無論お相手が出來ないとして、帝大の赤門派の人々は大抵が學者肌である。コツコツと學理の研究を眞面目に力めてゐるやうな人が多くて、早稲田派のやうな戰ひの人を出さない。そこらが原因してゐると思ふ。だがさうかと言つて早稲田派に學者がないのではない〉として挙げられるのが、**逍遥**であり、**筑水**であり、**抱月**である。

〈全體から言つて軍容が奮闘的の性質を有してゐる〉として比喩的に具体例が挙げられ、〈坪内博士は別に置き、**島村君や金子君といふ人は全軍の主能で、參謀長といふやうな役目**もある。長谷川天溪君とか徳田秋江君とかは、先鋒の飛將軍で、當るところを任せず薙ぎ立てた後から、進む人々が、正宗白鳥君なり、水野、相馬、中村、片上などの諸君であらう。それからは皆腕が確かで、一人一人槍を使つたり、刀を使つたりしてそれぞれの働き振りに個々の異ひはあるが、一騎當千といふ人々だから、これだけの軍勢で押出したら天下に恐るゝ人はない譯である〉と、早稲田派の星図を描き出して見せている。

結局、春葉の強調するのは、〈中には後藤宙外君や中島孤島君などのやうに、同じ學派から出てゐて、然も全然別な道を歩める人もあるけれど、要するに早稲田派の勢力は、此の團結といふ事によつて保たれてゐる〉ということである。

春葉は最後に〈早稲田派中に於ける私の最も好める人々〉として、〈片上君の評論と、相馬君の飜譯と、正宗君の小說〉を挙げ、〈一體に新しい傾向を文壇へ與へたといふ事は、早稲田派の最も誇りとすべき、大なる功績だ〉と結んでいる。

この「**早稲田派文士の長短**」に展開された六人の文士の談話として掉尾を飾っているのが、社会学的な立場からの自然主義評論で知られた龍峡・樋口秀雄（一八七五～一九二九）のもの。龍峡は、「**早稲田派なるもの若しあらば**」と題して、〈私には元來早稲田派、赤門派などゝ區別立る事が解らない〉と始めるが、春葉と同様に早稲田派の〈團結〉の強いことを指摘している。〈帝大出身者はその（ママ）以外の人に、何か相談を懸けても向ふが妙に疑つて來さうな心配から、遠慮して十分に打明けなくなる。で、勢ひ仲間同志のみにはそれ程隔てを置かない處から、黨同伐異のやうに他より見らるゝに過ぎぬのだが。が決して團體を造つてゐる譯ではないので、却つてお互に自分天狗で孤立主義に傾いてゐるやうな工合

だ〉と〈赤門派〉について述べ、〈早稲田の出身者は之に反し團結もよければ仲間のまとまりもよくついてゐる。殊に新聞事業に關係のある人々の間には常に聯絡を取り氣脈を通じて居らるゝと思ふ。自分の專攻の社會學からいふと、よく團結してその勢力で他に當る事は近頃の歴史で最强の武器となつてゐる。早稲田派の人々に此の觀念の强いのは羨しい事で、團體の名譽なり利益なりの爲には自分を犧牲に供しても盡すといふ精神は、日本の武士道氣質かも知れぬが、兎に角獻身犧牲の念に富んでゐる〉と語っている。

さらに、龍峡が挙げる早稲田派の具体例は、次のようなものである。〈**批評界に於ての大頭は何と言つても金子、島村の兩君と、新しいところで片上、相馬、石橋の三君だらうと思ふ。**世間の多くがいふやうに、**金子君は故大西君の學統を承け、**島村君は坪内博士の學統を繼いでゐる。が併し、博士と島村君とはその行方が全然異つてゐて博士は寧ろ創作を生命とし時あつてか批評の方に關係する、といふのに反し、島村君は主として批評を生命としてゐる。**金子、島村兩君を比較すると思想界の批評家としては、金子君の方が一頭地を抽いてゐるやうだ。**よくその**中心たる歐洲古來の思想界に遍つて、その大勢に通じ居らるゝ**と思ふ。併し**文藝の批評になると、お手のものだけあつて島村君は一枚上手だ。**私は同君の美學の講義を直接に聽いた事はないが、間接に拜見したり、「近代文藝の研究」に収められた諸篇、それから諸方の新聞雜誌に於ける議論などで見ると、美學者といふ資格として、從來の思想や說明をより深く又異れる言ひ表はし方、考へ方で說明しやうとされる試みの努力は先づ認める事が出來る〉と論じられている。

続けて、龍峡は抱月の弱点も併せ語り、〈近代の生理的、心理的の美學には深いやうだが、哲學的にその書かれたものの上に深いとは言へない。又英國流の美學說には通じて居られても、獨逸流の美學に於ては比較的研究が足りないのか、それとも等閑に附されたのか、といふ風に見へる〉と指摘しているが、この表現内容にも、〈獨逸流の美學〉に強い筑水との対照が響いていると想像される。

さらに、龍峡は〈早稲田派の文士〉として天溪、天弦、御風・相馬昌治（一八八三～一九五〇）、湛山・石橋省三（一八八四～一九七三）、白鳥を、続けて〈準早稲田派〉として花袋・田山録弥（一八七一～一九三〇）を具体的に論じ、最後に、〈早稲田派の人々には餘り輕々しいところがあるやうだが、批評家のある人々、及び作家として起ちつゝある人々には、此處らを考へて貰ひたいと思ふ〉という忠告の言葉で、この文章を結んでいる。

以上のように、六名の文士の談話「**早稲田派文士の長短**」（明42・11　第一五巻第一四号）には、早稲田派の文壇における地位や評価、早稲田派の文士それぞれについての印象・評価が語られており、本稿の考察の主たる対象である金子筑水に関して言えば、逍遥・操山門下の評論家として抱月と

並称され、特にそのプラグマティズムとナチュラリズムとの関係論、〈懐疑〉の思想に文壇・論壇からの関心が寄せられていたことが確認されるだろう。

三、『太陽』掲載の筑水の論説一覧

早稲田派の評論家として右のような評価を得ていた筑水の明治四〇年代の評論、とりわけ『太陽』文芸時評欄を担当するようになってからの彼の論説には、多様なモティーフ・テーマによって〈新理想主義〉の思想が展開されている。その具体的諸相を検討するに先だって、『太陽』に掲載された筑水の全論説一〇七篇の標題を以下に掲げておきたい。[14] このうち、⑦から⑨⑨の九三篇が、筑水の文芸時評欄担当時期に発表されたものである。

	題名	発表年月日	掲載巻号
①	「東洋精神」	明40・6・1	第一三巻第八号
②	「自然主義と文明問題」	明41・1・1	第一四巻第一号
③	「個人主義の盛衰」	明41・9・1	第一四巻第一二号
④	「進化論の哲學界に及ぼせる影響」	明42・6・1	第一五巻第八号
⑤	「傑出せる人格」	明42・11・10	第一五巻第一五号
⑥	「ルドルフ、オイッケン」	明43・1・1	第一六巻第一号
⑦	「入社の辭」	明43・7・1	第一六巻第一〇号
⑧	「ハウプトマン」	同右	同右
⑨	「自然主義論の色分け」	同右	同右
⑩	「新しい両性問題」	明43・8・1	第一六巻第一一号
⑪	「平凡生活」	同右	同右
⑫	「二葉亭全集を讀む」	明43・8・1	第一六巻第一一号
⑬	「快樂主義の文藝を排す」	明43・9・1	第一六巻第一二号
⑭	「精神界の事業」	同右	同右
⑮	「故高山君の墓に詣でゝ」	同右	同右
⑯	「ロマンチシズムとナチュラリズムとの對照」	明43・10・1	第一六巻第一三号
⑰	「ホッフマンスタール」	明43・11・1	第一六巻第一四号
⑱	「文藝及思想の取締」	同右	同右
⑲	「公立劇場」	同右	同右
⑳	「四十三年の回顧」	明43・12・1	第一六巻第一六号
㉑	「獨語」	明44・1・1	第一七巻第一号
㉒	「反動」	同右	同右
㉓	「世俗的要求」	同右	同右

㉔「トルストイの追想」	明44・2・1	第一七巻第二号
㉕「國民思想の動搖」	明44・3・1	第一七巻第四号
㉖「觀照と實行」	明44・4・1	第一七巻第五号
㉗「觀照の背景」	同右	同右
㉘「劇界の氣運」	同右	同右
㉙「神經衰弱」	明44・5・1	第一七巻第六号
㉚「外來思想」	同右	同右
㉛「近代文藝の二種類」	明44・6・1	第一七巻第八号
㉜「文藝院の設置」	同右	同右
㉝「文壇側面觀」	明44・7・1	第一七巻第一〇号
㉞「事實と氣分」	同右	同右
㉟「劇界の新しい試み」	同右	同右
㊱「壞頽の氣風と新生面」	明44・8・1	第一七巻第一一号
㊲「新味」	同右	同右
㊳「夏期」	同右	同右
㊴「現實教（人間改造論）」	明44・9・1	第一七巻第一二号
㊵「科學的精神と文藝」	明44・10・1	第一七巻第一三号
㊶「科學的人生觀」	同右	同右
㊷「帝國劇場の歌劇」	同右	同右
㊸「近代主義の淵源」	明44・11・1	第一七巻第一四号
㊹「斷片語」	同右	同右
㊺「四十四年の文壇」	明44・12・1	第一七巻第一六号
㊻「事實と想像」	明44・12・1	第一七巻第一六号
㊼「思想と境遇」	同右	同右
㊽「婦人問題」	同右	同右
㊾「展覽會事件」	同右	同右
㊿「イブセンからショオ」	明45・1・1	第一八巻第一号
(51)「懷疑から肯定」	同右	同右
(52)「イブセン式ショオ式」	同右	同右
(53)「現代の哲學」	明45・2・1	第一八巻第二号
(54)「若い作家」	同右	同右
(55)「新しい經驗」	同右	同右
(56)「生活の藝術化」	明45・3・1	第一八巻第四号
(57)「新しい經驗」（再び）	同右	同右
(58)「文藝奬勵問題」	明45・4・1	第一八巻第五号
(59)「ズーダーマンの新作」	同右	同右
(60)「坪内博士の受賞」	同右	同右
(61)「批評の批評」	同右	同右
(62)「ルイゼ、フオン、トスカナの自白（現實の社會問題）」	明45・5・1	第一八巻第六号
(63)「近頃の傾向」	同右	同右
(64)「繪畫展覽會」	同右	同右
(65)「近代社會劇の公演に就て」	明45・6・1	第一八巻第八号
(66)「所謂新しい女」	同右	同右

⑥⑦	「個人と犠牲」	明45・6・1	第一八巻第八号
⑥⑧	「ストリンドベルヒ逝く」	同右	同右
⑥⑨	「過去二十五年の回顧」	明45・6・15	第一八巻第九号
⑦⓪	「文藝家の女性觀」	明45・7・1	第一八巻第一〇号
⑦①	「女性の本領」	同右	同右
⑦②	「女性論」	明45・8・1	第一八巻第一一号
⑦③	「獨逸劇壇の風潮」	同右	同右
⑦④	「文壇觀測」	明45・9・1	第一八巻第一二号
⑦⑤	「明治文學」	同右	同右
⑦⑥	「フローベル」	大元・10・1	第一八巻第一四号
⑦⑦	「乃木將軍の自仞」	同右	同右
⑦⑧	「國運の進歩と退歩」	大元・11・1	第一八巻第一五号
⑦⑨	「官權に縋る人心」	同右	同右
⑧⓪	「精神界の現在」	大元・12・1	第一八巻第一六号
⑧①	「新年所感」	大2・1・1	第一九巻第一号
⑧②	「ショオとマーテルリンク」	同右	同右
⑧③	「女優問題」	同右	同右
⑧④	「藝術と社會の進歩」	大2・2・1	第一九巻第二号
⑧⑤	「ロマンチック詩人ノワリスの追憶」	大2・3・1	第一九巻第三号
⑧⑥	「思想界から觀た政界の紛糾」	大2・4・1	第一九巻第五号
⑧⑦	「近著二種」	大2・4・1	第一九巻第五号
⑧⑧	「フアウストの邦語譯」	大2・5・1	第一九巻第六号
⑧⑨	「生命の力」	大2・6・1	第一九巻第八号
⑨⓪	「社會の生活の形式(序論)」	大2・7・1	第一九巻第一〇号
⑨①	「再び社會生活の形式を論ず」	大2・8・1	第一九巻第一一号
⑨②	「生命力の交感(社會生活の意義)」	大2・9・3	第一九巻第一二号
⑨③	「青年と文藝」	大2・10・1	第一九巻第一三号
⑨④	「内職問題」	同右	同右
⑨⑤	「精神界の地方地盤」	同右	同右
⑨⑥	「自然と創造」	大2・11・1	第一九巻第一四号
⑨⑦	「樗牛梁川の追憶」	同右	同右
⑨⑧	「和辻氏の『ニイチェ研究』」	同右	同右
⑨⑨	「藝術的活動の根本義」	大2・12・1	第一九巻第一六号
⑩⓪	「英雄主義か凡俗主義か」	大4・1・1	第二一巻第一号
⑩①	「行詰れる物質文明の破壞」	大5・6・15	第二二巻第八号
⑩②	「ドイツ文化の將來」	大9・6・15	第二六巻第七号
⑩③	「物的改造と心的改造」	大10・1・1	第二七巻第一号
⑩④	「文化戰爭」	大11・1・1	第二八巻第一号
⑩⑤	「文化主義の本義」	大15・1・1	第三二巻第一号

四、『太陽』における筑水のドイツ思想・文化受容と近代日本精神論

『太陽』に発表された筑水の全論説一〇七篇の全標題を右に挙げたが、明治四三（一九一〇）年七月、筑水が『太陽』文芸時評欄を担当することになったときの⑦**「入社の辭」**には、〈自分が進んで此の事業にたづさはつたは、甚だ勝手な次第ながら恰もこれが自分の好修業と心得たからである。今や文藝界及思想界の變遷推移は、げに目まぐろしいまでにあわたゞしい。讀者諸君と共に、廣く此活現象に觸れ、深く時代の趨勢に注意するは、自分に取つて、極めて興味深い事がらに感ぜられる〉と文芸時評欄担当就任の意図を記し、〈本文藝欄は、故高山樗牛君以來、常に時勢に先んじて、常に時勢を率ゐ來たつた名譽ある欄内である〉と、『太陽』文芸時評欄の威信にかけての自らの意気込みを表明している。さらに、〈時勢を觀察し批判すると同時に、願くは當面の進路に一道の光を認めたい〉と、その抱負が綴られている。

筑水が文芸時評欄の先輩である樗牛を引き合いに出して当代の思想・文芸批評を展開した『太陽』掲載の文章としては、他に⑮**「故高山君の墓に詣でゝ」**があり、筑水は樗牛を〈ロマンチックな精神〉〈アスピレーションの人〉と表現し、〈君が歿後、文藝界及思想界は、急轉直下の勢を以て、一轉又再轉、前代に比類ない變化を受けた〉と状況分析をする。そして、〈今日の現實的傾向は、君がロマンチック、スピリットに負ふ所決して尠少ではない。今日まで君が生きながらへて、今日の文壇に立つたならば、君は果して如何なる進路を取つたであらうか〉と問いかけの形をとり、〈今日の文壇は、勿論君が在世のをりとは著く調子が異つてゐるにもせよ、尚餘りにアスピレーションに缺けてゐる。我々は、今日初めて創業の大事な時期に臨んでゐる。すべてを新らしく建設しなければならぬ。此のまゝ、行きづまつて、破滅のまゝに終つてはならぬ。正しい意味に於て、我々は『現代を超越』しなければならない〉と、樗牛の精神にたいする尊重の念とともに〈現代〉超克の重要性――〈新理想主義〉の樹立を示唆する。

このように、〈すべては果たして夢であらうか。君がアスピレーションに満ちた精神は、今日尚活きてゐる事實ではないか。夢から目醒めて、我々は、更に大なる夢の裡に、更に大なる事實を造らなければならぬ〉と、樗牛を引き合いに出しつつ自らの覚悟を表明することが、この文章⑮「故高山君の墓に詣でゝ」の眼目と思われる。

以下、〈現代を超越〉するために『太陽』に展開された筑水の論説のうち、その〈新理想主義〉の諸相がうかがえる文章につい

て、便宜上、次の項目を立てて考察を進めたい。筑水のテクストについては、掲載誌『太陽』そのものと『明治文学全集　50　金子筑水・田中王堂・片山孤村・中澤臨川・魚住折蘆集』（稲垣達郎編　筑摩書房　昭49・10）所収のものを除いて、まとまったかたちでは入手が困難であることから、長い引用になることをご了承いただきたい。

（一）ドイツ哲学・〈現代哲学〉の紹介

筑水が文芸欄を担当することになる半年前―明治四三（一九一〇）年一月の『太陽』に掲載された⑥「**ルドルフ、オイッケン**」には、バーゼル大学・イエナ大学の教授を歴任したドイツの哲学者＝オイケンの思想について紹介され、前掲の「文藝の將來」（『中央公論』明39・4）において既に用語として使われていた〈新理想主義〉についての筑水自身の把握内容がうかがえる。

オイケンは、十九世紀後半の実証主義的・唯物論的思潮に異論を唱え、精神的生命の意義を説く〈新理想主義〉の哲学・宗教論を展開。その〈新理想主義〉というのは、近代文明を批判して、非人間的になった文化の営為のしがらみから人間の心を解放し、新しい〈内的生命〉、純粋な倫理的・精神的活動を創造することを意味している。

筑水の⑥「ルドルフ、オイッケン」の「第一」には、当時の哲学思想のうちで世人の関心を引いた二つの学説として、プラグマティズムとオイケンの主張が挙げられ、〈倫理的、實際的、人本的、内省的傾向〉をもつオイケン哲学の特徴に対して、プラグマティズムは〈著く認識論的、實在論的、又は理論的〉であるとされている。

筑水がそもそもオイケンの思想に傾倒したのは、〈認識論〉や〈實在論〉が、オイケンにとっては〈哲學上の主要問題ではなく、我々の内的生活又は人格的生活のみが哲學上の眞の問題〉と考えられているからである。オイケンの中心思想が、〈飽までもフイヒテの倫理的人生觀〉に存し、彼が〈深く人性の奥にたどり、人格的生活の内面に進入して、そこに動かすべからざる普遍的精神生活を發見し、群がる撞着矛盾を克服して、新世界新生活を開拓創造し來たるが人生の眞面目だと觀じてゐる〉からである。〈内的奮闘（インナーリヒ）又は精神的勇猛（ガイスチヒ）によつて新生活を開展し來たる事〉がオイケン哲学の中心思想であるからである。

このように、筑水の解釈によれば、オイケンの言う〈精神生活〉とは〈眞我の生活其のもの〉であり、〈從つて我々が精神生活に這入るは、自我に歸へつて、いよいよ自我の生活を深める所以で、決して知らぬ他境へさまよひ去る所以ではない〉ということ。そして、〈精神生活が創造及革新を生命とする事は、一斑藝術及學問の世界に於て最も著し〉く、〈生活の新しい意味を發見するが藝術の眼目で、統一を缺いた知覺的知識に系統を與へ、一切を思惟の組織的體形に改造するが學問の要旨〉であり、〈道德的生活は全體の人生を層一層豊富に深遠に内的に自我的に人格的に改善する勞役其のもの〉であるとも記されている。

人類は要するに〈宗教的生物〉で、〈簡單に宗教を解釋すれば、そは要するに人類が親しく絶對者と交はる所以〉とし、〈絶對者の力は、我々人類の自我の中心に宿つてゐる。勿論全勢力を開展した姿に於てゞはなく、將に無限に開展しやうとする可能性を備へて自我の中心に宿つてゐる。此の可能性を現實に開展して行くが人間の眞の生活で、又此の可能性は、ひとり人間の力によつてのみ實現される。こゝに歴史の眞の意義、乃至人生及宗教の眞理が存する。斯く觀じて、初めて人生には限りなく高い意味が存する〉と、筑水はオイケン哲学を総括し、その思想から学ぶ所は多いと結んでいる。ここに、オイケン哲学が筑水の自家薬籠中のものとされたと言っても過言ではない。

そもそも精神的なものを見直しその優位を説く〈新理想主義〉＝Neuidealismusは、自然主義・実証主義・唯物論などへの反動として、十九世紀後半から起こった思潮のこと。哲学上では新カント派、オイケン、ベルグソン（Henri Bergson 1859〜1941）らの思想を、広義には現象学や生の哲学を含み、文芸上ではトルストイらの人道主義的な作品を意味している。後述するように、自然主義の行き詰まりを打開すべく新たな精神生活の建設を呼びかけたオイケンらの運動＝〈新理想主義〉は、まさに筑水の文芸思想のバック・ボーンとなったことが、その主張の類縁性によって推測されるのである。

ちなみに、筑水は、ベルグソンの『創造的進化』（大2・10　現代哲学第一編　早稲田大学出版部　桂井當之助との共訳）も翻訳・刊行している。また、⑯「**ロマンチシズムとナチュラリズムとの對照**」と㊵「**科學的精神と文藝**」などにも、〈新理想主義〉文芸への希求が表明されている。

さて、文芸時評欄担当を退く直前の大正二（一九一三）年一一月に掲載された㊽「**和辻氏の『ニイチェ研究』**」では、ニーチェの生活意志の哲学、価値転倒の新道徳などについて詳細に解説されている。日本の論壇・文壇では、既に明治三〇年代に〈美的生活〉論争を始めとするニーチェ・ブームが起こっていたが、明治末年から大正初年代にかけて、ベルグソンに続いて再び注目されたのがニーチェ。この時期、長江・生田弘治（一八八二〜一九三六）が『ツァラトウストラ』を訳出し、ニーチェ、キルケゴール研究から出発した和辻哲郎（一八八九〜一九六〇）の他にも、漱石に師事し大正教養派を成した安倍能成（一八八三〜一九六六）や阿部次郎（一八八三〜一九五九）らが、個人の内面を追究し理想主義的な人格主義を提唱する過程で、ニーチェ研究や紹介に携わっている。

筑水自身も、しばらく後には、ニーチェの思想が評論・解釈のかたちで明瞭に表わされている処女作と晩年の大著――『悲劇の出生・善悪の彼岸』（大4・2　現代哲学第三編　早稲田大学出版部）を翻訳し刊行しており、㊽「和辻氏の『ニイチェ研究』」も、筑水自身のニーチェにたいする関心の表われであったと言えるだろう。

明治四五（一九一二）年二月の㊸「**現代の哲學**」では、〈哲學上の問題は、古人の學說や書物の中に見出ださるべきものではなく、學者其の人の實生活に基いて起こるパーソナルな問題〉であり、〈パーソナルな活きた問題を取扱へばこそ、さういふ哲學には、おのづから權威も有り生命も有る。現代の興味から遠ざかつた問題の思索に、何ほどの力が有らうぞ〉という筑水の哲学観が表明されている。

続けて、〈どこまでも科學的に正確にと努むべきは無論であるが、ひとへに自然科學の研究ばかりに偏して、最も重大な人類生活其のものを閑却した哲學が果たして眞の哲學と言はれるであらうか〉と問いかけた筑水は、〈自然科學偏重の氣風は、確に現實生活の閑却といふ惡傾向を招いた〉ということを指摘する。〈自然現象については、深い學識を備へてゐながら、人間生活については、殆ど無智な人が幾らも有る。元來人間生活のための哲學は、人間生活其のものに就いて、豐富な經驗と深い洞察力とを備へてゐる人によつて、初めて成就される。複雜な現實生活に涉つて、詩人の頭に感ぜられるやうな無限の微妙までも會得し得る人で、初めて眞の哲學を組織することが出來る〉というのである。〈哲學は人間生活の解釋でなければならぬ。人間生活全體に關する最高の理解が哲學でなければならぬ。高義の人間學が現代の哲學でなければならぬ。古來の問題や形式に拘泥し、自然科學の一方にばかり偏することが、必しも哲學の能事ではない。むしろ傳來の問題や形式を捨てゝ、直に活きた現代の問題を料理するのが現代の眞の哲學ではないか〉と訴えている。

そして、〈多數舊式な哲學の間に有つて、やゝ現代的哲學たる異彩〉を放っている〈新哲學〉として例示されているのが、既に、⑥「ルドルフ、オイッケン」で紹介されていたジェームズ（William James 1842～1910）、シラー一派のプラグマティズムとオイケンの〈人生觀〉と、加えてベルグソン哲学である。

それぞれの哲学についての筑水の所見は、ジェームズらのプラグマティズムについては、〈實生活尊重の精神〉に基いており、〈實生活を中心に立てゝ、一切の知識を此の中心點から批判しやうとする〉哲学であると規定したうえで、同時に、〈たゞの知識論たるに止つて、實生活其のものに就いては、まだ何等特別な研究を進めてゐない〉という点が、〈直接現代の要求に應じ得られない弱點〉であると、プラグマティズムの〈弱點〉が挙げられている。

それに対して、オイケンの哲学は、〈徹頭徹尾人間生活に關する哲學〉、〈所謂レーベンス、フイロソフイー〉で、〈就中彼れが、現代の傾向に深い注意を拂ひ、廣い眼を以て、全體の生活現象を批判してゐる所に、著しい特色〉があるとしている。だが、オイケンの〈人生のつかみかたが、全體に於て、餘り文化（クルツール）の發展といふ方面に重きを置き過ぎた嫌〉があり、〈學術、道德、藝術、宗教を絶對の精神界と觀て、此の精神界の發展を人生其のものといふ風に解釋〉

し、〈現實生活のつかみかたが著しくアイデアリスチックで、前代のロマンチシズムの脈が、まだ其のまゝ殘つてゐるやうな嫌〉があるとしている。

ベルグソンについては、〈廣い意味の生活現象、物質現象から區別された意識現象〉が、彼の研究の中心であるが、〈一斑生活現象を物質現象から區別することに全力を注ぎ、其生活現象について、精密な研究を遂げるが、哲學の中心事業と考へてゐる〉こと、すなわちベルグソンには、〈人間生活を、其の根柢から新に研究して行くといふ傾きが強い。根柢から新にといふところに彼れの哲學の未來が有る〉と述べている。

そして、プラグマティズム、オイケン、ベルグソンの三者に共通する点として、〈單に人間生活を哲學の中心問題（唯一問題）とした心ばかりでなく、人間生活其のものに關する見解〉であることを挙げている。筑水によれば、これら三者は、〈孰れも現代流行の人生觀上のナチュラリズムに反抗し、人生其のものには、遂に自然現象の中には見出だされない一種複雜微妙な特徴が存することを主張〉し、〈不斷の創造と建設〉が彼らの中心思想となっており、〈前代のロマンチシズムが主張したやうな、永久に調和された人生を認めない。現實の不調和矛盾を克服して、次第に新しい生活をクリエートして行く所に、人生の特徴が在ると觀る。將來の人生は、今から新に造出さるべきもの、徒に過去の人生にのみ拘泥すべきでない。「人生はこれから」と觀る所に、此等諸哲學の現代的な氣分が現はれてゐる〉というのである。

さらに、〈ロマンチシズムの絶對調和の人生を破壞して、過去の人生の上に、更に新しい人生が造られて行くと觀るが、プラグマチズムの經驗的精神である。ナチュラリズムが主張するやうな必至的運命觀を退け、人間は目的と自由とを懷いて、漸次より完全な生活を造りあげて行く者といふが、シラーやジェームスの精神である〉こと、〈現實の矛盾や缺點の改築を主眼とする改善主義（オリズム）〉がその〈態度〉であること、〈人生は畢竟無限の改造〉であるというのが、ジェームズなどの〈根柢思想〉であることが述べられている。

また、オイケンもジェームズらと同様に、〈知識、道德、宗教、藝術等の形に現はれてゐる普通の精神界は、無限の變化發展を遂ぐべきもの、而して此の變化發展はひとへに人類みづからの努力如何に繫つてゐる。自由と創造とを除いては、他の眞の人生に求められない。自然の必至的運命に服從しながらも、エネルギッシ（ママ）に自由と創造とを主張する所に、眞の生活が有る。我々の絶對の滿足は、ひとり之れをエネルギッシな創造の中にのみ見出だすことが出來る〉という哲学であることが指摘されている。

残るベルグソン哲学の〈根本精神〉は、〈一斑生活現象又は意識現象を物質現象から精密に區別して、不斷の進化又は刻々の創造を、意識生活の精髄〉であると觀ることにあるとされ、〈物質現象には正確な意味に於ての進化が無い、進化的連續といふ

意味に於ての時が無い。無數の過去が現在に働いて、豫め計り知られない刻々の創造的進化を遂げる〉のが、〈生活現象の特徴〉であり、〈創造的進化といふことを取除いては、生活は無意味である〉という見解に、ベルグソン哲学の〈根本精神〉を見ることができるとしている。

以上のように、オイケン、ジェームズ、ベルグソンの哲学をまとめてきた筑水は、彼らについて、〈また人生其のものを精しく説明した者とは言へない。彼等は僅かに大體の輪郭を説明したに過ぎない。現代の要求は、現實生活其のものゝ、もつともつと深い解釋に在る。現在當面の具體的生活に應用されるやうな哲學が、現代の要求である。我等はさういふ意味の人生哲學が發達することを深く望んでゐる〉と、それぞれの哲学を評価したうえで、しかしそこに安住することのないさらなる〈建設〉をめざした言葉で、この論説を結んでいる。

これらの論説は、確かに西洋哲学の紹介のかたちをとっているが、筑水の解釈自体が彼自身の思想として昇華されていると見てよいだろう。すなわち、筑水自身がその哲学的素養をもとに、自己の理想とする哲学を摂取・受容し、自らの〈新理想主義〉標榜のバック・ボーンとしたと言えるのではないだろうか。

(二) ドイツ文学・芸術の紹介

筑水がその〈新理想主義〉の思想を展開するにさいして紹介したドイツ文芸の具体例としては、⑦「入社の辭」と同号に掲載された⑧「**ハウプトマン**」がある。この論説では、ドイツにおける近代的自然主義演劇を確立し、後にはロマン主義的傾向を強めた劇作家・小説家＝ハウプトマン（Gerhart Hauptmann 1862〜1946）の〈長所〉として、〈すべて自分の感じを有形にして、綿密に且客觀的に之れを寫出す技倆〉を挙げ、〈性癖〉として〈現實生活に涙を濺ぐと同時に、暫く現實生活を離れて、一種の夢幻世界に、自由に其のスチムヽングを走らせる〉ことを指摘している。

また、⑩「**新しい両性問題**」の前半では、ハウプトマンと同時代の劇作家で、大胆な性の描写で知られるヴェーデキント（Frank Wedekind 1864〜1918）の戯曲作品『ヒダラ一名美の道徳』（Hidalla, oder die Moral der Schönheit）が紹介されている。

天才肌の主人公ヘトマンは、〈完全な美貌を備へた男女のみが集合し、自由に相交際して、將來に美しい人類を造出すを主眼〉とする〈美的道德論（所謂ヘトマニスムス）〉を提唱。それは、〈今日の婚姻制度を破壞し、又自由戀愛をも否定して、教徒の男又は女は、必ず他の教徒の愛着に服從すべきものといふ規定に從ふ〉というもので、〈人種改善〉がその眼目である。だが、このような〈教義〉を信奉するヘトマンの一挙一動は、世間の嘲笑を買い迫害の的となって、彼は結局自殺するという筋である。

筑水は、この作品に関する批評として、〈現代風俗の壞頽や、社會改良論者の無能を諷したもの〉という説と、〈ヘトマニスムスは、ヱドキント自身の眞面目な主張〉

であるとする二説を挙げた上で、〈眞理は、むしろ両面に跨つて、エドキントは、一面所謂社會改良論者を諷刺すると同時に、他面現代文明の改造は、遂に已みがたいといふ精神を傳へたものであるらしい〉としている。そして、この〈奇怪なヘトマニスムス〉のなかに、〈幾多の重大な近代問題〉が含まれ、ヴェーデキントは〈深く現代文明を悲觀〉しているように見えると述べている。

筑水はこの論説においてヴェーデキントを例に挙げ、〈一層深い現代文明の暗黑面に着眼した結果〉、〈放縱野鄙な性慾の追求、男女關係の無秩序、戀愛問題の無規律、獸性の横行濶歩〉が〈多數近代詩人の着眼點〉となると記して、〈兩性問題、夫婦問題、家族生活問題等〉の重要性を強調しているのである。

筑水による当代のドイツ語文学紹介としては、さらに⑰「**ホッフマンスタール**」がある。十九世紀末、オーストリア・ヴィーンのカフェ・グリエンスタイドルに集った反自然主義を標榜する若き文学青年たちのグループ〈若きヴィーン派〉の詩人・劇作家＝ホフマンスタール（Hugo von Hofmannsthal 1874～1929）は、ドイツ新浪漫派の代表的作家。その戯曲作品のうち“Der Tor und der Tod”は鷗外・森林太郎（一八六二～一九二二）によって、この⑰「ホッフマンスタール」掲載の二年前＝明治四一（一九〇八）年一二月に「痴人と死と」（『歌舞伎』一〇一号）として訳出されている。[15]

筑水は⑰「ホッフマンスタール」の冒頭に、ホフマンスタールや、ステファン・ゲオルゲ（Stefan George 1868～1933）らが中心となって、〈一時獨逸文壇に特殊の異彩を放つた『藝術雜誌』の宣言によれば此等少壯の墺多利詩人は、人生改善のための藝術とか社會進歩のための藝術などいふ主張を避けて、單刀直入、藝術のための藝術、美のための美を、當面の努力の目的と掲げた〉と紹介し、ホフマンスタールの〈一種の唯美主義〉は決して〈ありふれた在來の淺薄な唯美主義〉ではなく、〈今日までも獨逸の自然派文藝が、或は眞の一事に熱中し、或は社會問題に沒頭して、藝術當面の本意が、動もすれば沒却されんとするに反抗して、先づ「藝術は藝術なり」といふ昔の形式を採用したが、彼の所謂唯美主義である〉ことを強調している。ホフマンスタールの〈唯美主義の根柢には、明らかに在來の平板な自然主義に對する反抗が潜んでゐると同時に人生と藝術との關係に就いて、一層親密な關係と深い要求とが假定されてゐる〉というのである。

さらに筑水は、この論説において、〈時勢を統率し、人心を支配する者は詩人であり、藝術は、最高の意味に於て、人生の支配者である〉という、ホフマンスタールの「詩人と現代」の言葉を紹介し、現代人が希求しているものが、〈ポエトリーといふ大なる魔力〉であり、〈此の魔力に魅されることが、現代人の最深最切な要求〉で、〈詩人は、すなはち、此の魔力を以て人心を支配し制服する者である〉という、〈藝

術と人生との不離の關係が明示されてゐるばかりでなく、一種獨得の藝術觀と人生觀とが、明らかに其の根柢に潜んでいる〉というように、ホフマンスタールの詩人觀・芸術觀・人生觀を読み取っている。

また、かつてのヘルマン・バール（Hermann Bahr 1863～1934）に師事して、〈漠然たる意味の徴象派は印象派の詩人として數へられた〉ホフマンスタールが、当代のドイツ文壇において、〈一方の驍將リヒァード、デーメルと應呼して、優に一派の徴象派兼印象派の詩人を代表〉し、〈徹底的自然派の文藝が、餘りに皮相の客觀的事相に拘泥し文藝の精神であるべき感銘や印象を疎外したに反抗して、先づ印象其のものに重きを置いた〉ことが、デーメル（Richard Dehmel 1863～1920）やホフマンスタールの特色であるとも論じられている。

官能の陶酔と形而上的瞑想との調和を求めた生命の賛歌によって表現主義の先駆をなしたデーメルの場合には、〈シンボライズ〉しようとする〈不可思議な或もの〉が〈宇宙的靈魂〉であり、ホフマンスタールの場合には、〈人生という不可思議な魔力〉を意味しているというのである。〈茫乎として摑みがたく捕へがたい、然しながら極めて强烈な力を備へた一氣（Hauch）が人生の精髄〉だというのである。

したがって、ホフマンスタールの〈唯美主義の根據〉は、〈感銘を味ひ、魔力に魅されることが、藝術の第一義で、眞を考へ、善を勵むは必しも當面の目的でない〉とされる。筑水によれば、ホフマンスタールの芸術解釈は、〈藝術は、人生と同じく、一種の魔力〉というもので、〈ポエトリーは、感奮印象の塊〉であり、〈名狀しがたい靈魂の呼吸を傳へれば、其れがやがて立派な魔術である。詩人は、一種の魔術者に外ならない〉というのである。

このようなホフマンスタールの作品のうち、〈ドラマは、餘りに印象的リ、カルであるため、從來の寫實劇に慣れた者の眼には、如何にも不思議に見える〉ため、筑水はホフマンスタールについて、〈文壇に於けるアーノルド、ベックリンといふ趣き〉があり、〈ネオ、ロマンチスト〉と彼が呼ばれるのは必然的と見なしている。

具体的には、ホフマンスタールの「窓に立てる夫人」「ソバイデの嫁入り」「ティチアンの死」などの作品を考察した筑水は、ホフマンスタールが〈詩人を解釋して、惱みつゝ樂む者、苦みつゝ喜ぶ者、重荷を負つて勇む者といひ、詩は畢竟魔力のみと解した所以も、明瞭に此の點から會得〉され、彼が〈ゲーテとヘッベルを尊崇したも決して偶然でない〉と論究している。

このように、筑水によるホフマンスタール解釈の内容も、彼自身が標榜していた〈新理想主義〉を基準にしたものであるということ、ドイツ文学を語りながら、実は筑水が近代日本の文壇で志向していた思想の表明となっているということに気づかされるのである。

また、明治四四（一九一一）年六月発表の㉛「**近代文藝の二種類**」では、多種多様な近代文学を、フランス文学など〈觀照

的〉なものと、ドイツ、スカンジナビア、ロシア文学などの〈實行的〉なものに分類することに妥当性を見出したうえで、近代ドイツの〈自然派の文藝〉を論じたドイツの批評家の説が紹介されている。〈最近代の文藝が、其の起源に於て、深くフランスの寫實派文藝に負ふ所が有るとすれば、ドイツ最近代の文藝の特質は、そもそも如何なる點に存する〉かという疑問にたいして筑水が用意する解答は、〈メタフイジカル又はフイロソフイカル〉、すなわち〈人生觀又は窮境統一的、人生を統一的に纏めて觀ずる傾向〉をもっているというもの。そしてその〈適例〉として〈印象的自然派〉と呼ばれるデーメルが挙げられ、さらにはヴェーデキントやハウプトマンの名前も列挙されている。

一方、フランスの作家、ゾラ（Emile Zola 1840〜1902）、フローベール（Gustave Flaubert 1821〜1880）、モーパッサン（Guy de Maupassant 1850〜1893）らには、〈一種明確な人生觀〉が持たれているし、フランス文学のなかにも〈著しく哲學的な人生觀的なもの〉もあるが、概して〈ドイツ其の他の文藝に感ぜられるやうな強いメタフイジカルなにほひが少ない、どこまでも突きこんで統一的に廣い人生を觀じやうとする要求や努力が餘りに際だつてゐない、むしろさういふ風な努力を退けて、狹い範圍で細に深く印象を捕へやうとしてゐる態度が特有な傾きに見える。眼前の經驗に綿密で忠實で、敢て他を顧みないとするやうな態度が彼等の長所に見える。メタフイジカルな傾向は、彼等に取つては、北方野蠻人の陰鬱な奇習のやうに考へられてゐる〉と、筑水は分析するのである。

それに対して、ドイツ、ロシア、スカンジナビアの文芸は、〈一種ミスチックな宗教的な趣味〉が著しい。〈弊害の方面から見れば、妙に陰鬱で暗澹として晦澁で且わざとらしい怪異に走りやすい傾き〉はあるが、〈長所としての方面から見れば、シンセリチーが有りバイエチーが有り、深みが有つて、どことなくおごそかな趣致の有る所が、此等北方文藝の特色〉であるとして、具体的にニーチェ、イプセン、トルストイ、ドストエフスキーらの〈著しく宗教的でミスチック〉であることを主張する。

さらに、筑水は、フランス近代文芸のなかにも、〈宗教趣味なもの、又は一種の宗教味と名づけ得らるべきものが有ることは言ふまでもない。自然派が與へた一種の深い淋しみの如きも、之れを一種の宗教味と名づけるに障はなく、又例へばボードレール、ルナン一流の宗教味は、フランス文藝の中には至る所に廣く見出だされる普通な現象であるかも知れない〉としたうえで、けれどもそれらの〈宗教味〉は、〈北歐文藝に現はれた根づよい重々しい宗教味や神祕主義とは、餘程面目を異にしてゐる。北方文藝に現はれてゐるやうな彼の沈鬱なミスチックなヲンダーフルな趣味は、到底フランス文藝の特長とは思はれない〉、〈さうした重くるしげなミスチックな脈は、パリー詩人に取つては、むしろ厭はしい北方の野趣であつて、センシチーヴな精妙な印象

が彼等の得意とする所では無かつたか。粗雑な暗い重くるしい感じは、彼等に取つて、餘りに愚かしいものでは無かつたか〉と記している。

そのフランス近代文芸に対して、〈北歐文藝〉は、〈宗教的でミスチック〉であると同時に、〈著しくエシカルで、又廣い意味に於て實行的〉、〈全體に倫理的調子が強く、精勵とか憧憬とかいふ精神に著しい、重くるしくはあるが、全體に眞地面に感ぜられるが、北歐文藝の特質〉であると、繰り返し述べられる。

このような比較のもとに筑水が問うのは、〈一方の文藝が著しく統一人生觀的で宗教的で倫理的であり、他方の文藝が然らずといふは、其の主要な原因は果たしていづこに求めらるべきであらうか〉ということ。そして、その疑問に対して、〈廣く言へば國民性や時代精神の相違、狹く言へば作家の人格乃至天分によるもの〉という解答を用意している。

また、〈我國の現文壇には、西洋各國の文藝が一時に流れこんでゐるため、全體が錯綜して、容易に其の眞相を見きはめがたい。一方に於てロシヤ文藝が盛んに研究され歡迎されるかと思へば、他方に於てはフランス文藝や其の主張が盛んに取入れられてゐる。文藝の種類の豐富であることは、むしろ慶すべき現象であらう〉と、双方のタイプの文学が同時並行的に受容された当時の日本の文壇状況を説いている。

〈然しながら又一方から考へれば、我國民性は甚しくフランスの國民性に似てゐると信ぜられてゐる〉、〈あつさりした輕妙なものゝみが喜ばれて、深く沈んだ重々しいものに、孰れかと言へば嫌はれる傾きが有る。勿論文壇の一部には、ロシヤ風の趣味が貴ばれるといふ事實もあるが、特に近頃の傾向を見渡すと、フランス文藝のむしろ短所とも思はれる輕い一方の浮いた趣味が頻に持囃される傾きさへ有る〉と指摘したうえで、今後の日本文学の方向性について、〈理想的な欲望を言へば、我々はフランス流の鋭く精しい文藝を欲すると同時に北歐の沈んだ深みの有る文藝をも要求し、或は熱烈或は沈痛變幻自在な南歐趣味の文藝を求めると同時に、力の籠つた強い北歐趣味の文藝をも要求する〉と述べている。

そして、この㉛「近代文藝の二種類」は、〈若し我國民性が果たしてフランスの其れに類似してゐるとすれば、そこに先づ我々の眞に熟慮すべき深く大なる疑問が横はつてゐるではないか。文藝の特徴が、根本的には國民性に制約されるものとすれば、我國の文藝は結局フランスの流れを追つて進むものであらうか。よし夫れならば夫れで、文壇の進むべき方角も、多少は默得されないでもない。勿論此の種類の問題は、主として批評家に取つての問題であらう。けれども其れが、廣く我文藝の全體に關する重要な疑問であることは疑ひない〉と、むしろ日本文壇の主体的な方向性の選択を訴える言葉で結ばれている。

このように、ドイツ文学を中心にした西洋文芸の紹介・解釈を通しての筑水の主張にこめられたのも、日本文芸の方向性への

指針を有することの必要性であり、〈新理想主義〉という価値基準を目標とすることの提唱であったと言えるだろう。

(三) 自然主義論／近代主義論

筑水が『太陽』を舞台に活躍を始めた明治四〇（一九〇七）年前後、泡鳴・岩野美衛（一八七三～一九二〇）、抱月、天渓らを始めとした自然主義評論が盛んで、筑水も『太陽』の他に、『中央公論』『早稲田文學』『新小説』にも自然主義論を執筆している。

『太陽』掲載の②「**自然主義と文明問題**」では、すべての自然主義が必ず〈文明問題〉を源としていることや、近代文明史上、ルソー（Jean-Jacques Rousseau 1712～1778）、ゾラ、ニーチェ、ヴァーグナーが自然主義の土台に立脚して〈新人生觀〉を樹立していることが指摘され、自然主義が文明を破壊すると同時に、〈新文明〉の切実な要求者であることが論じられている。

『新小説』に発表された「自然主義論」（明40・11）でも、近代ドイツ文壇における自然主義の変遷や価値を論じ、日本の文学状況が類似していることを指摘したうえで、自然主義文芸が将来の文芸の先駆である過渡期の文芸であることを挙げ、その意義を評価し発展を希望している。すなわち、筑水は単なる現実暴露や平面的な〈寫實主義〉を退けながらも、自然主義の意義を正当に理解し、〈將來の文學〉に果たす役割を評価していたと考えられるのである。

また、⑨「**自然主義論の色分け**」では、昨今の自然主義論が、〈純粋人生觀上の眞面目な論戰、作家や評論家みづからの實行上の主張〉に傾き、〈全體が著しく主觀的又は個人的になつてきたゝめ、自然主義に關する解釋もさまざまに分かれてきた〉と指摘し、自然主義について〈大體明白に區別される種類〉として、（1）徹底的自然主義論、（2）温和的自然主義論、（3）自然主義的非自然論、を挙げている。

（1）徹底的自然主義論というのは、〈たゞ現實を現實とする所に、眞の自然主義が存すると説く〉花袋や天渓などをさす。この種類の徹底論者は、〈自然や人生を、肉體的にも精神的にも、一種の必至的運命に支配されてゐるものと覺悟〉しているように見える。〈必至的運命に支配されてゐる我々は、どう藻掻いても足掻いても、現實なるが故に、たゞ之れに忍從する外はない〉と説く。そのために、〈懷疑的精神〉は無用で、〈男らしいストイックな所が、徹底的自然主義論の特色〉であるとしている。

（2）温和的自然主義論は、抱月を中心とする『早稲田文學』社のメンバーの〈主觀的自然主義論〉とも名づけられ、〈物質生活の壓迫に對する主觀の悲哀又は苦悶の狀態を、近代自然主義の立脚地〉と見ている。〈悲哀、苦痛、煩悶、懷疑が自然主義の母〉で、〈宗教上の絶對的慰安は、自然主義者の立場からは、必然避けがたい要求である〉と説くために、（1）より多く〈精神生活に傾いてゐる〉としている。

（3）自然主義的非自然論は、〈漱石氏に關係ある帝大出身の新しい評論家諸氏〉を

代表者とする。〈自然主義的人生觀〉を、〈到底一種の器械的必至論又は唯物的人生觀に過ぎない〉と解釈して排斥する傾向を示し、〈哲學上の自然主義〉を〈今日の自然主義的人生觀〉と見なすために、〈主觀的苦悶に重きを置く前の主觀論を、自然主義の本領から離れた似而非自然主義論だと非難〉し、〈懷疑と苦悶とを拂ひたいといふ態度〉が見られるとしている。

筑水は、これらの諸傾向が、単に自然主義論であるばかりでなく、文壇の作家や評論家の〈眞面目な人生觀〉であり、〈各自の人生觀を、どこまでも眞面目に發達させて行くが、何より大事〉であると、この論説を結んでいる。

さらに、⑯「**ロマンチシズムとナチュラリズムとの對照**」では、筑水は〈ロマンチシズムの根柢特質〉と〈ナチュラリズムの根柢特質〉を比較対照し、〈一斑精神活動の變遷乃至樣式を研究〉しようとする。ナチュラリズムは、〈眞實を生命〉とし、ロマンティシズムは、〈遊神又は憧憬を眼目〉とすると区別されていることを挙げて、ロマンティシズムは、主として〈情の要求〉に立脚し、ナチュラリズムは主として〈智の要求〉に立脚すると説明することができるのではないかと述べる。

筑水にとってロマンティシズムとは、決して〈單純な純理の一邊のものではなく、燃えるやうな情生活の要求に、一種理性の衣を着けた藝術品と觀らるべきもの〉であり、その具体例としてゲーテ始めノヴァーリス、ティーク（Ludwig Tieck 1773～1853）らの〈元來メタフイジカルな獨逸詩人〉が挙げられている。

一方、ナチュラリズムの直接の起源は、〈ロマンチシズムの非現實的な夢幻的な空想的な傾向に反抗して、先づ現實の實相又は自然の眞實を摑まうとした智的要求〉に基づいたものとして、フローベールを始めとする〈近代の自然派〉が〈人生の眞に徹底することを根柢の精神〉としたことを例に挙げている。

このような対比のもとに筑水が最終的に強調するのは、〈理性本位の要求は、人間の要求の全體ではない。理性本位の要求の外に、我々には、別に情意上の切實な要求がある。我々は智性の要求を滿足させると同時に、特に情意的要求をも滿足させなければならぬ〉ということ。すなわち、〈眞實な生活を要求すると同時に、自由な生活乃至力ある生活を要求する。合理的生活を要求すると同時に、エナージチックな感銘に深い生活を要求する。眞を目的とする生活の外に、善を目的とし美を目的とする生活を要求する〉ということ。また、このような生活は、〈主智的要求に基づくといふよりも、むしろ主情意的要求に基づく〉としている。

そして、これらの〈自由な力ある生活〉は、〈前代のロマンチシズムの其れの如く、眞實を沒却した空なものであつてはならぬ。むしろ眞實によつてピューリファイされた純正なものでなければならぬ。斯かる情意本位の要求は、到底人間に避けがたい。ひとへに眞のみを追求して、内に藏された情

意本位の要求を満足させないとき、我々は、そこに強く主觀の空虛を感ずる。情意本位の要求が滿たされなければ、如何に眞の要求が滿たされても、我々は、內に顧みて、常に深い寂寞を感ぜざるを得ない〉としている。

このように筑水の論の展開を見てくると、⑯「ロマンチシズムとナチュラリズムとの對照」は、ふたつの主義の単なる〈對照〉にとどまらず、これらを両立させ区分を超越させるような〈新理想主義〉の文芸への希求が表明された論説であったと言えるだろう。

また、明治四四（一九一一）年四月の㉖「**觀照と實行**」の冒頭では、田山花袋が『早稲田文學』掲載の「離れて見んとする心」において、〈藝術家〉に、〈積極的に實生活に卽いて、飽まで人生のために苦闘する流派〉＝〈人生派〉と〈實生活を離れて、靜に其の實相を眺めやうとする流派〉＝〈藝術派〉があり、〈近代ナチュラリズムの文藝〉は〈純藝術派〉に属すると述べていることを紹介している。筑水によれば、これは、〈ナチュラリズムに關する論爭が烈しかつた頃から、作者や批評家の心の內に蟠つて、陰に陽に全體の論爭や態度を裏づけた重要な思想〉であり、〈飽まで實人生に卽いて行かうとする傾向と、むしろ其れを離れて觀やうとする態度と、其の間の爭ひが、今日まで充分決せらるべくして、まだ充分決せられなかつた複雜な問題〉であり、〈藝術觀上の根本問題〉であるばかりでなく、〈人生觀上の根本問題〉だというのである。

筑水は、〈飽まで實人生に卽いて行かうとする態度〉を〈實行的〉または〈人生的〉と呼び、〈出來るかぎり離れて之れを觀やうとする傾向〉を〈觀照的態度〉と名づける。〈觀照派〉は、〈文藝の本領を觀照と定め、觀照以外の目的を文藝に强ゆることを避けるのみならず、文藝があらゆる小主觀の犧牲と成ることを嫌つて、出來るだけ客觀的に冷靜に人生の實相を觀照するところに、眞の文藝が存すると觀る〉が、それに対して、〈人生派〉または〈實行派〉は、〈文藝が實人生の一部分であるかぎり、文藝は必然的に人生のために存するものと考へられる、觀照も畢竟は實行の手段であり、文藝も結局は人生の要具に過ぎないと觀る〉とされている。

さらに、〈すべて在來の人生觀を擲出してしまつた結果すべて在來の努力や實行に絶望してしまつた結果、所謂身動きもせず、ジッと眼をつぶつて、靜に人生の流れて行くさまを心眼に寫す〉というのが〈觀照派の態度〉であるのに対して、〈實行派〉は、〈人生の本領は、觀照に存せずして、飽まで實行生活に存する〉と主張する。〈觀照は畢竟實行の手段で、實行に伴はれない觀照は無意味〉であるというのが〈實行派の態度〉である、とも説明されている。

実際に、〈觀照派〉の作家として、ツルゲーネフやフローベールの〈大なるレシグネーション〉の例が挙げられているが、筑水の主張は、〈藝術家の本領が觀照であるとすれば、藝術家が人生を觀照することは、

其れがやがて藝術家の實行生活である〉ということ。〈觀照と實行は、言はゞ、人生の兩方面で、觀照なしに人生は成立しないと同じく、實行なしに、矢張り人生は成立しない〉ということである。

したがって、〈ひとへに實行のためといふ點にのみ着眼せず、たゞまつすぐに人生を觀照して、其れがおのづから實人生に影響を及ぼす所に、文藝獨得の性質が有る〉ということになる。筑水によれば、〈作家が、離れて人生を觀やうとするは當然〉のことだが、〈純粹の觀照又は客觀的觀照といふことは、要するに比較的の事で、絶對の意味に於て、純粹客觀的觀照などいふものが、本來有り得る道理が無い。我々が如何に我觀を抑へて冷靜に構へても、觀照を實行する物は、依然として我れである。我れは、さまざまの習癖や、先入主となつた物の見かたや考へかたや感じかたの塊である〉ので、〈客觀的觀照といふことは、嚴格には、小主觀や小人生觀を退けて、出來るだけ大きな廣い深い主觀や人生觀によつて、事象を觀照するといふ意に外ならない。勿論其等の深い主觀は、觀照する我れの背景であるに留つて、觀照其のことは、單に其等の主觀をプロジェクトするといふ意味でないことは言ふまでもない〉とされている。

また、この㉖「觀照と實行」と同誌上の㉗「**觀照の背景**」の冒頭には、ロシア文学翻訳家の昇曙夢（一八七八～一九五八）の『時事新報』紙上の見解が紹介されている。それによると、当代のロシア文学は〈ロマンチックの文學〉で、〈何等かの憧憬の情が現出しており、アンドレーエフ（Leonid Nikolaevich Andreev 1871～1919）にせよソログープ（Fyodor Kuz'mich Sologub 1863～1927）にせよ、〈古い宗教や哲學や道德や、古い理想の權威を破壞して何等か新しい權威にありつき、此の恐るべき惡夢のやうな現實生活の不要（ママ）を慰めやうとする憧憬の情から逃つて居る文學〉であるというのである。そして、昇曙夢がロシア作家の作品について〈現代人の祈禱〉であるとも言い、また〈日本の自然派の作家等は單に事實の權威を認めて、周圍の人生を如實に描寫するだけで滿足してゐるやうであるが、ロシアの作家には夫れだけでは滿足出來ないから苦しいのである〉とも記していることが、筑水によって紹介されている。

さらに筑水は、〈フランスの文藝は倫理的背景を缺き、ドイツ、スカンヂナヰア、ロシアあたりの文藝は、著しく倫理的又は實行的氣分に富んでゐる〉というヨーロッパ批評家の見解を挙げて、〈フランス近代の文藝とドイツ其の他の諸國の近代文藝との間〉の〈著しい區別〉を指摘。〈フランス流の冷靜な科學的氣分から成つた文藝と、全體の調子に於て、深く人生の何ものかにあこがれてゐるドイツ其の他の諸國の文藝とは、其の間にどうしても同一視しがたい著しい區別がある〉というのである。

〈同じナチユラリズムの文藝と言つても、ドイツあたりのものに、形式的にはフランスを學んだ（ママ）ものであるに係らず、概して言へば社會的とか道義的とか又は哲學的とか

いふやうな氣分や調子が著しく、イプセンの破壞懷疑のドラマの裏面には、人生の強い憧憬の倫理的情調が籠つてゐる〉というのである。

しかし、筑水の本意は、フランス文学が〈藝術的〉で〈人生的〉でないなどと言うことではない。〈純客觀的觀照を標榜した近代フランスの文藝中にも、明らかに上の意味の背景的我觀が現はれてゐる。ペッシミズムやマテリアリズムや、乃至必至的運命觀やナイイヒリズムが、フローベール其の他の作家の意識的又は半無意識的人生觀を成してゐる〉こと、また、〈近代ドイツ、スカンヂナヰア、ロシアあたりの文藝が概觀して、人生的であるといふ所以も、其等が單に客觀的觀照に賴らないといふたのではなく、實は其等諸國に特殊な文明や信仰や氣分や空氣が、半無意識的に作家を支配した結果と判斷されなければならぬ〉としている。そして、〈我らは決して觀照を排斥する者ではない。要は觀照が其の人の天分や信仰や人生觀に密接な關係が有ることを明らかにして、其の人の實行生活が、必然的に觀照に影響することに注意するに過ぎない〉と結んでいる。

㉝「文壇側面觀」では、〈在來の自然派の文藝の中でも、特に異彩を放つてゐる二種類の傾向〉について、〈一は正宗白鳥氏によつて代表されてゐる一種絶望的なシニカルな傾向〉で、〈他の一は田山花袋氏によつて代表されてゐる純粹自然派の直系とも見られる一種の宿命觀的態度〉であるとしている。さらにこれに加えて、〈近代的傾向の一種類を代表してゐる別種の流れ〉として、永井荷風（一八七九～一九五九）が代表する派を挙げている。筑水の見るところでは、〈自然派の運動を率ゐた作家や評論家の多數は所謂藝術肌の人といふよりも、どこか無骨で生眞面目で、著しく主義やフイロソフイーの傾きを備へてゐたに反して、此の派は（派と言ひ得べくば）、所謂純藝術肌の人が多く、初から六ッかしい理屈を離れて、純趣味性の行くがまゝに己れを委せたといふ風〉が見え、〈人生を一種パセチックに觀る所に、此の種類の文藝の特長が存する〉としている。

筑水がさらに〈別種な傾向〉として最後に挙げるのが、〈現在文壇に勢力を持つてゐる老大家〉について。〈文壇のさまざまな思潮が、互に入亂れて混戰を極め、藝術や人生に關する重大問題が激烈に爭はれる時に於ても、其等をむしろあはれげに面白げに傍觀して、特に其等時流の外に超然として、更に其等以上又は其等以外に藝術家の行くべき途が有ることを暗示するやうに見える〉としている。この〈老大家〉については、固有名こそ挙げていないが、『スバル』『三田文學』などに集った浪漫派・頽唐派・享楽派の青年たちに仰がれた森鷗外をさしていると推測される。

明治四二（一九〇九）年に『半日』（『スバル』明42・3）で文壇に再登場した鷗外は、〈あそび〉の心境で身辺の事柄を写した短篇小説を数多く発表したが、その多くは〈傍觀者〉として世界を俯瞰しているような文章で綴られていた。文壇の批評など

に煩わされない高踏的な心持ちを、鷗外自身は〈Resignation〉[16]という語でも示していたのである。

筑水はこの㉝「文壇側面觀」で、続けて、〈現在文壇が、假令不完全ながらも、歐洲文壇に現はれてゐるさまざまな複雑な傾向を一處に集めてゐる〉ことを指摘したうえで、〈新しい文藝は、要するに年若い新代に取つての文藝〉であり、〈自己の生存を一層深め強め且確實に成し得るやうな或何ものかを追求めて〉おり、〈現在の文壇から、更に新しい傾向が產出るとすれば、其の一は、必ず此等青年の傾向を代表するものでなければならない〉と結んで、今後の新しい文学の登場を希求する言葉で結んでいる。

明治四四（一九一一）年八月の㊱「**壞頽の氣風と新生面**」では、〈一般精神界は、孰れの方面を見ても、一種の重くるしい惰氣と壞頽の氣風とに滿ちみちて、やるせないじつないと云つたやうな氣味が全體をひしひしと壓してゐる。生氣が無い、活氣が無い。思想界全體がふやけきつてゐるやうに見える〉と始められ、〈まだしも兩三年前ナチユラリズム勃興の時代は、耽溺とか破壞とか唱へられたにかゝはらず、無意義な舊習を破壞し、みづから信ずる所に向つて猛進するといふ一種の生氣――若々しい氣風に滿ちて、全體に人心が緊張され高調されて、其の間に一種ヒロイックな士氣さへ見られた〉と比較している。

さらに、〈ワイタル、フォースも生氣も無くなつて、滿目たゞ壞頽の氣風濛々たるさまが、今の思想界の狀態とも見える。泣言、愚痴、嘆聲、自分の恥辱を無遠慮にさらけだす流行の告白、其等が今の文壇のはやりではないか〉と、日本の現文壇の傾向を批判している。

そして、このような文学傾向と絡めて、筑水の人生觀は、この文章では次のように表現されている。〈人生は、如何に考へても、永遠に連續する不可思議な力である。個人の勝手な破滅は、廣い生活の上から見れば殆ど無意味に過ぎない。短くはあるが我々の一生は得がたく貴い。其の短い生涯に於て、如何に迷つても苦んでも、迷ひながらも苦みながらも、より深くより高い經驗を積んで、出來るだけ此の生存に意味あらしめるが人生〉。〈破壞呼ばゝりや、壞頽呼ばゝりや、其れは決して衷心の叫びではない。生存せんがためには、我々はいやでもおうでも新生面を拓いて行かなければならぬ。新生面の開拓と生存とは、彼れ此れ離れられない關係を持つてゐる〉というものである。

筑水はこの㊱「壞頽の氣風と新生面」の文章の随所に若い世代への期待を表明しており、末尾には、〈今の若い思想界と、此の思想界を受けつぐべき一層若い青年とは、其れより前代の人々に較べると、固よりさまざま新しい特色を備へてゐる。特に目だつて感ぜられるは、彼等の感能や感情が究めて鋭敏で且デリケートな一事である。感情の精緻でデリケートであることは、一面から觀察すると、彼の忌はしい女性主義（フェミニズム）の勃興かとも疑はれないではないが、又他の

方面から考へると、此の種類の特長は、すべてが複雑に分派し來たつた近代文明の特殊な傾向とも見られる〉としている。

そして、この論説は、〈我々の生活は、根柢から新しく改造されなければならぬ。これが現代が未曾有の革新期と名づけられる所以ではないか。新生面の開拓は、前途尙多事であり困難であることが想像される。多事でもあり困難でもあらうが、どうあつても新生面を開拓して行かなければならないが、今人の運命で、而もそれが昔からの人生の常態ではないか〉と結ばれている。

このように、時代状況との関わりで自然主義を論じた内容においても、筑水の論の展開は、〈新生面の開拓〉という〈新理想主義〉への指向性を示していることが確認されるのである。

また、㊱「壞頽の氣風と新生面」と同誌上の㊲「**新味**」には、前号に発表した㉝「文壇側面觀」において、〈今の文壇には、近代文明に特殊なさまざまの流れや傾向が、究めて複雑な状態に於て、縱横無盡に入りみだれてゐるさまと觀察〉したことを受けて、さらに、〈ナチユラリズムの勃興以來現文壇の重な作家や評論家は、兎もかくもそれぞれの新趣味や新傾向を世間に宣傳し、〈文壇は此等の作家や評論家によつて、殆ど全く一新された觀〉があるとしながらも、〈若い作家や評論家〉が〈ひとへに現文壇の重な作家を眞似て、たゞ其の後に就いて行くことばかりに腐心してゐるらしく見える。彼等の技巧は著しく進んでゐる。官能や情調の精緻でデリケートなことは、眞に驚くべきほどである。けれども全體の作の精神やトーンに至つては、現文壇の重な作家の模倣で、其れ以外に殆ど何等の新意も見出されない〉と、若い世代の傾向を批判している。

筑水の言うには、〈ナチユラリズムに關する爭鬪時代が過ぎ、全體がモダーニズムと言つた風な立脚地に立つて、これから着實にそれぞれ新生面をきり拓いて行かうといふが、現在の大勢〉。〈リアリズムやナチユラリズムの後に來たものは、やれシンボリズムであるの、クラシヽズムであるの、ミスチシズムであるのといふは、要するに理窟の上の評論で、歐洲文壇の大勢を想像すると、今は斯かるイズムに拘泥する時代は過去つて、着實に創作の上で實効を擧げやうとする時期〉に移っている。

〈精神界一般の大動搖大革新の後をうけて、俄に全文壇や全思想界を風靡するやうな大作や大傾向は現はれてゐない、又今のところ容易にさやうな事が臨まれるわけでもない。されば今のところさしあたり各作家は、各々其の天分に從つて、人生の新しい情味、少なくともこれまで普通に看過された人生の深い味ひをさぐり出さうといふが今日の大勢〉のように思われる。〈在來の型にはまつたリアリスチックな行きかたといふよりも、むしろこれまで氣附かれなかつた新しい深い味ひを鑿索し探求して行くといふ有樣が今日の大勢らしい〉として、具体的に挙げられたのが、ホフマンスタールが、〈廣い意味で謂ふモダニーズムの立脚地に立つて、暫く見捨てられてゐた古典美を、

更に新しく現代の人心に移し代へやうとしてゐる〉こと、ヴェーデキントが、〈劇詩人としての價値は別としても、兎もかく戀愛問題に關して、一種大膽な新しい見かたを世間に公けにした〉こと、バーナード・ショウ（George Bernard Shaw 1856〜1950）が、〈兩性問題に關し、又は廣く人生の發達に關して、其の獨得な見かたや皮肉やに一種の新味を示した〉ことなどが挙げられている。

そして、〈廣い意味でいふナチユラリズム以後の歐洲文壇が、まだ肉躍り血湧くやうな大活劇は演じてゐないが、あらゆる方面に、それぞれ特殊な技能を發揮して、何はおいても先づ人生に關する深い新味を探出さうとしてゐる努力は、さすがに着實に且うらやましく感ぜられる〉と述べ、若い作家や評論家にむかっての助言で結ばれている。この論説においてもまた、〈人生に關する新味を探出さうとしてゐる努力〉への賛意を示すことで、〈新理想主義〉文学の登場を祈念していると考えられるのである。

また、本来なら、次項で扱うのが妥当であると思われる㊸「**近代主義の淵源**」は、〈自然主義といふ言葉が、一時文壇の流行語であつたやうに今日では、近代主義（モダーニズム）といふ言葉が、文壇や思想界の流行語となつてゐる。近代主義、近代精神、近代生活、近代人、此の種類の言葉は、或意味で言へば、一種不思議な魔力を持つてゐる。中年以上の人、又は思想界の一部の人は、此の種類の言葉を聽くと、一種堪へがたい惡感と苦痛とを覺えるに反して、一斑に青年又は一部思想界の人は、近代主義といふ旗下に、偉大な勝利をかち誇つてゐるやうに見える〉と始められている。

筑水の自然主義論と時代精神・国民思想論を架橋する論説として、本項でその内容を見てみると、この論説で筑水が試みているのは、〈「近代主義の因つて流れ來つた淵源根據〉を明らかにすること。それは、〈近代主義が、著しく物質的であり且個人主義的である點から、一部の人は、近代主義とは、既に生命を失つた前代の古物であるやうに主張〉し、〈他の一部の人は、複雜多様な近代生活に着眼して、近代主義は、これまでの歴史には現はれなかつた全然新しい傾向であると見る〉という具合に、〈先づ近代主義の大體觀に關して、世間の見る所がそれぞれ違つてゐる〉という事実があるからである。

〈近代主義〉についての筑水の解釈によれば、その一面は〈反抗〉そのもの、〈前代の思想傾向に對する激烈な挑戰〉、〈すべてを破壞して、全く新しいものを建てやうとするが、近代主義の根本精神〉であり、したがって、〈革命的又は革新的意氣に滿ちた者が近代人で、舊思想や舊傾向の保存に傾いた者は、すべて非近代人として排斥される〉傾向にあるというのである。

そして、〈最近自然科學の發達によつて遂げられた人類生活の改造〉は、〈近代主義の最も顯著な實現〉であり、〈近代生活又は近代主義といへば、我々は自然科學的知識によつて遂げられた偉大な而も極めて

複雑な工藝經濟交通商業等の現代生活を聯想する。鐵道、電信、工場の大機械、そこに近代主義の根本精神が潜んでゐる。新しい事實は更に新しい事實を產み、めまぐろしいまでに複雑にデリケートに煩雑に成り來たつたが近代生活である。近代主義は、正確な事實の上に立脚した複雑きはまる文明の精神とも言へやう〉と続けている。

〈エレメンタリーな事實の是認、此の事と聯關して我等は更に彼の激烈な生存競爭が、近代生活の眞面目であることゝ想はざるを得ない。生存のための激烈な苦闘煩悶、これが近代生活に特殊な現象である。近代生活は勞役を意味する、刻苦を意味する。心血を絞つて、營々勞役に服するが、現代の生活である〉と記した筑水は、〈此の意味に於て、近代主義は、複雑な事實の間に處する勞役主義とも名づけられる〉とも述べている。

だが、〈單に事實の尊重、科學的知識の應用、生存競爭、勞役主義、其等が決して近代主義の全體ではない。此等表面のあらはな傾向の裏面に、更に隠れた近代主義の深い精神が潜んでゐる。我等は、此の根本精神を、假に强烈な精神上の要求と形容したい。此の精神上の要求の何ものであるかは、近代人みづからにもまだ不明であるが、兎もかくもエレメンタリーな生活を築きあげて、更に其の上に社會上道德上藝術上宗教上新しい道を通つて進んで行きたいといふが、近代人の胸中に潜んでゐる要求である〉というのである。

さらに、〈一ト通りの平凡生活に甘んぜられないが、近代人の特質〉であり、〈現代思想界の動搖、文藝界の波瀾、宗教界の變動、其等は皆此等近代主義の影響〉である。〈個人主義的傾向は、近代主義の著しい特色であるといふ。生存の意義を考へて、深い自我の滿足を求めるとき、人間は勢ひ先づ自我的に個人的に傾かざるを得ない。懷疑的、絶望的、虚無的傾向、其等がまた近代主義に著しい傾向であるといふ〉が、〈勿論悲觀主義や虚無主義や、廣い近代主義の全體ではない。廣い意味で近代主義と言へば、我々は飽まで道德上藝術上宗教上新しい道を切開いて行きたいといふ傾向と解釋しなければならぬ〉と論じている。

〈近代文明や近代主義や、畢竟は此等の文明や傾向を產出した特殊の國民性又は種族性に基くべきは言ふまでもないが、歐洲民族就中西歐民族が、如何なる民族性を備へて、如何なる事情の下に、此の特殊な文明乃至傾向を產出したものであらうか、それが我々に取つて興味深い問題である〉として、筑水がたどって見せるのは、〈單に最近代の文明のみでない、十五六世紀から今日までの西歐文明を通じて〉、〈首尾一貫した常住不變な西歐民族性が動きつゝあつたこと〉、〈文藝復興期以降千波萬波の文明や傾向を產出した民族性其の同一な民族性が、矢張最近代の特殊な文明や傾向を產出したものであること〉である。

そして、筑水の挙げる〈西歐民族の特殊性〉の〈三特質〉は次のようなものである。第一に〈眞實な生活の追求〉、〈すべてファンタスチックな空中樓閣的な生活を退けて

確實な地盤の上に堅固な生活を築きたいといふ要求〉、〈ナチユラスチックなリアリスチックな生活の追求〉であり、〈西歐民族就中ゼルマン民族は、古代印度種族や小亞細亞の民族と違つて、理知のために理知を弄ぶ風なコンテンプレーテヴな又は甚しく主觀的な民族ではなかつた。具體的事實又は經驗的事實の尊重、これがむしろ西歐民族の特徴〉であり、〈綿密に精確に客觀的事實を調査し、たゞひとへに確實な事實にのみたよつて、根據の有る堅實な生活、どこから衝いても隙間の無いやうな堅い生活を築きあげるといふが、西歐民族生來の強い傾向〉で、〈自然科學は、此の種類の傾向を持つた民族特產物〉であつたというのである。

〈西歐民族就中ゼルマン民族が、最初からリアリスチックでナチユラリスチック〉であつたこと、すなわち〈文藝復興期〉は〈ゼルマン民族の勃興期〉で、〈中世紀以來の空想迷信に反抗して、リアリスチックなナチユラリスチクな文明を造出した點〉にあり、また、〈十七八世紀の啓蒙時代〉も〈リアリスチック〉であり、〈英派哲學者の純粹經驗論、フランスの感覺論及唯物論、一班自然科學の進歩、文藝界に於ては、イギリスの散文小說乃至諷刺文の發達。宗教界に於ては、デイズムの發生等〉、〈全體が著しくリアリスチック〉であつたことを指摘している。

〈西歐民族の特殊性〉の〈特質〉の第二は、〈精神生活の追求〉、〈內的に深みの有る充實された生活を追求する傾向〉、〈著しく情意的な又はアイデアリスチックな傾向〉。

〈文明史家チエムバレーンなどが論じてゐるとほり、西歐民族は、一見互に矛盾してゐる二種類の特質を兼備へてゐた〉というのである。そして、〈一面に於ては、非常に實際的な現實的な特徴を備へ、他面に於ては、著しくアイデアリスチックな傾向〉をもち、この〈兩傾向の調和、矛盾、消長が、廣い意味の近代文明とも解釋される〉というのである。さらに、〈西歐民族が、たゞひとへに實際的な尋常平凡な生活に滿足することが出來ず、內的生命に於て、どこまでも深く深くと進んでゐつたことが、彼等が尋常一邊の實際的國民に終らずして藝術の方面に於て、將た宗教の方面に於て、獨得の西歐文明を產出した所以〉であるとされている。

〈今日から見れば、殆ど不思議に感ぜられる彼の十八世紀の主知的運動の如きも、深く其の根柢をたゝけば根づよい情の要求又は信仰に立脚してゐる。十九世紀の最初のロマンチック運動の如きも、固有のアイデアリスチックな傾向が、其の前代の淺薄なリアリズムに反抗して、ひたすら一方むきに開展したものに過ぎない〉とされている。

〈西歐民族の特殊性〉の〈特質〉の第三は、〈自由な生活の追求であり、〈强烈な個人主義的傾向を意味〉し、〈十四五世紀以來、西歐民族が造出した文明は、大觀すれば、之れを個人主義的と名づけることが出來る〉と述べられる。そして、〈他の壓制又は盲從を蛇蝎視したこと、恐らく西歐民族より甚しきは無からう〉とし、〈政治上及

び宗教上の獨立戰爭が、充分に之れを證明してゐる〉とされている。

さらに、具体的に〈個人主義の主張者〉として挙げられているのが、イタリアのマキャベリ（Nicollò Machiavelli 1469～1527）、フランスのモンテーニュ（Michel Eyquem de Montaigne 1533～1592）、ホッブズ（Thomas Hobbes 1588～1679）、ルソーら。

筑水の考察によれば、〈最近代の文明乃至傾向、即ち狹義に謂ふ近代文明乃至近代主義の特徴〉は、〈古來の西歐民族の特徴に符合〉し、〈近代主義の特徴〉としては、〈著しく自然科學的なこと、實際的なこと、勞役主義なこと、即ち極度に現實的なことを數へ、更に其の裡面に、深い精神的要求、並びに個人主義的傾向が潜んでゐる〉ことを鑑みるとき、〈近代文明並びに近代主義〉は、〈西歐民族の現實的精神的並びに個人主義的の三大傾向に吻合する〉というのである。

そして、この「近代主義の淵源」という論説は、〈最近代主義〉が〈單に前代のロマンチシズムに反抗して起こつた簡單な現實的傾向ではない。遠い文藝復興期以前からの根本傾向が、永い間の試練を經、近く十九世紀のロマンチシズムをくゞつて現はれたもの〉であり、〈一國の文明、就中其の學問藝術宗教は、其の國民性といよいよ親密な關係が有る〉と結ばれている。

（四）時代精神論／国民思想論

自然主義・近代主義について展開された筑水の主な論説は、前項のようなものであったが、当然のことながら、それは、当時の思潮・風潮として認識されていたいくつかの〈主義〉――時代精神や国民思想の内容と無縁ではあり得ない。そこで、相互に関連する時代精神・国民思想論についての筑水の見解はいかなるものであったかを、次に確認しておきたい。

『太陽』文芸欄担当に就任する二年前の明治四一（一九〇八）年九月発表③「**個人主義の盛衰**」においては、筑水は西洋世紀末における〈消極的個人主義〉〈積極的個人主義〉など、個人主義の由来・種類・内容などを説き、真の個人主義はあらゆる思想の出発点であり、個人生活の真意に適合した団体生活を生み出すものでなくてはならないと強調している。

また、主張が題名に顕現している⑬「**快樂主義の文藝を排す**」で論じられているのは、二三年来の新興文芸が、〈必しもすべての生活を破壞し、若しくは否定すべき運命や、性質を備へたものでなく、むしろ新生活のための舊生活破壞と考へられなければならぬ〉ということ。すなわち、〈結局生活など無意味かも知れない、すべてたゞ空である無である〉というような考え方が蔓延し、〈今の人〉は〈すべての希望と確信とを失なつた放浪者〉であるということ。そして、〈虛無觀を取る者は、結局自分の生活を破壞するよりか外に途は無い〉が、〈同じ生活を破壞する位ならば、必しも虛無觀を取らずとも、人間の行き路は、外に幾らもある。破壞と竝んで、人間には建設の一面がある。虛無論者が、如何に惡戰苦

闘しても、人間に備はつた建設的精神は、どうすることも出來ない。活きたいといふ努力の裡に、夢幻の建設的精神が含まれてゐる〉ということである。

〈破壞主義や虛無主義と竝んで、又は此等の生活否定主義の弊に堪へ得ない結果、反對に生活肯定主義とも名づくべきものが、今日の文藝界及思想界に現はれてきた〉が、筑水が懸念するのは、〈就中今日の文壇には、一種輕薄な肯定主義〉が散見されることである。その〈一種輕薄な肯定主義〉の有する二つの傾向は、次のようにまとめられている。

近頃の文壇に、〈一種のデイレッタンチズム〉が再び頭をもたげかけている。〈デイレッタンチズムと肯定主義と、其の間に何等の關係も無いやうで、實は兩者の間に、極めて密接な關係〉があり、現代のディレッタンティズムは、〈所謂デカタン（ママ）的デイレッタンチズム〉であるということ。〈現實の生活に就いて、何等眞面目な考や確信があるでもなく、又必しも其の種類のものを得やうと望むでもなく、而も人生の各方面にわたつて、廣くさまざまの知識は備へながら、たゞ眞面目の一氣を缺いて、すべてを不眞面目な遊びごとに化してしまふが、デイレッタンチストの特色〉であり、〈獨りよがりの皮肉や戲謔が彼等の生命〉だというのである。

けれども彼らディレッタンティストは、〈現實の生活を嫌惡し否定するほどに眞面目ではな〉く、〈其の中心に於て、むしろ現世の快樂を追求して止まない。大體に於て、著くヘドニスチック〉であるのが彼らの特色で、しかも〈快樂を求めて、之れに到達し得ない結果、彼等の或者は、文藝の裡に隱れて、文藝其のものを、氣まぐれの遊びごとゝする。上品な遊びが卽ちデイレッタンチズムである。生活のための文藝などいふは、彼等には思ひもよらない道樂三昧又は遊戲三昧の文藝が彼等の生命である。こゝから一種のアート、フオア、アート、スクールが產まれてくる〉というのである。

さらに筑水が批判するのは、〈デイレッタンチズムよりも、一層明瞭に且一層積極的に肯定主義を標榜して立ち、而も今日の文壇に於て、暗々裡に多少の勢力を占めつゝある〉〈享樂主義又は快樂主義〉である。それらは、〈一斑文藝界及思想界の沈滯期の特產物、將來の文藝及思想のためには、むしろ賴しからぬ影響を殘すもの〉ではないかと危惧を表明している。

次には、〈デイレッタンチズム〉や〈享樂主義〉のもつ〈極めて輕薄な、深く遺憾に思はれる缺點〉が擧げられ、〈快樂追求の意味が、假令前代の單純な快樂追求と甚しく異なるにもせよ、苟も快樂を貪るを生活の目的とすること其の事が、既に全體の態度に於て、ひとへにイージー、ゴーイングを狙つた輕薄な行きかた〉であり、〈新らしい深い生活其のものを求めずして、ひとへに歡樂を味はふとするは、今日の如く行きつまつた時代に於て、單に一時の小康を得やうとする情ない態度〉であるとして批判されている。

〈人間が、其の本性に於て、快樂慰安を要

求することは、拒むことの出來ない事實である。けれども歡樂の要求を事とする生活は、到底我々に取つての最高の生活ではない。所謂人生の歡樂は、一種のイリュージョンに過ぎぬ。我々は、もはや斯かるイリュージョンに欺かれるほど愚かではない。人生至極の味ひを、簡單に歡樂と定めることが、初から得手勝手な沙汰でもあれば、また甚しい事實の曲解である。人生は決して單純に、快樂とか苦痛とかいふやうなものゝ塊ではない。苦樂以上複雜な深刻な、到底言葉を以て形容することの出來ない不可思議な情調が、一斑人生の味ひである。此の着眼點から觀察すれば、人生は歡樂の場所ではなくして、むしろ恐ろしい險はしい峻烈な嚴肅な場所である。歡樂に醉ふが我々の目的ではなく、嚴肅な生活の苦味を味はふが、我々の一生である。此の嚴肅な生活の經驗の裡に、我々は、人生の不可思議な運命を觀念しなければならぬ。然かのみならず、單に情味を經驗するばかりが人生ではない。生存の目的は、生活其のものに在る。我々は、嚴格な生活其のものを目的としなければならぬ〉と、畳みかけるようにして綴られているのが、この論説における筑水の主張であり、ここには彼自身の人生観が汪溢するように語られている。

また、大逆事件を始めとする当時の社会状況のもと発表されたと考えられる⑱「**文藝及思想の取締**」には、〈消極的な意味に於ての取締又は禁止の外に、積極的にあらゆる藝術や思想の發達を鼓舞奬勵する適當な處置が無くてはならぬ。藝術や思想を發展進歩させる事が、本來の積極的な取締の意義で、單に禁止や拘束を加へることは、むしろ第二段三段の措置で無くてはならない〉という毅然とした見解が表明されていると同時に、〈一斑の世間が、文藝思想其の他一斑精神問題に就いて今日まで、餘りに無智冷淡であつたを遺憾に感ずる。物質文明が唯一の國是で、精神文明は、さながら閑事業であるかの如く見做されて、此れに關する何等見るべき積極的手段が講ぜられなかつたを遺憾に感ずる〉という批判もうかがえる。

従来、穏当な表現や趣旨で展開されていた筑水の啓蒙主義的な見解は、この論説ではかなり直接的な物言いになっており、〈文藝院の設立〉を提唱しながらも、〈たゞし文部省が企てゝゐるとかいふ、あんな小規模な而も眞に文藝や思想を理解してゐる人を引くことの出來ないみじめなものでは、何程の効果が有らう。否、啻に効果が少ないばかりでなく、單に同趣味の人を集めたやうな文藝院では、前途の積極的方針のほども思ひやられる。精神問題が、一國の運命に、如何に重大なものであるかゞ理解されたならば、眞に有力な文藝院の設置のために費される資金は惜むに足らない。大規模の文藝院の設立によつて、積極的に文藝や思想の方面に人才を引くことが出來たならば、取締問題や禁止問題には、おのづから解決の途が開くであらう〉と結んでいる。

翌年＝明治四四（一九一一）年一月発表の㉑「**獨語**」は、「我れを如何に造るべきか」（『新小説』明42・11）や「主觀の悶」

（『早稲田文學』明43・4）などと通う内容で、真の〈主觀生活〉〈内的生活〉を取り戻す必要性が訴えられている。〈外的又は客觀的關係が如何にあらうとも、其等に生活の本義を求めず、主として主觀の力、價値、自由、安心、滿足に生活の第一義を置くもの〉で、〈主觀生活は卽ち情意の生活〉であると、〈主觀の力〉および価値を力説、〈情意生活〉の挽回、〈内的生活〉の創造を提唱して、〈新理想主義〉と繋がる思想が示されている。

〈近代生活の物悽（ママ）い力がひしひし感ぜられる、生存競爭はいよいよ激烈となり、落伍者や失敗者が踵を接して、社會の風潮は險惡を極めるに係らず、恐ろしい大器械は、更に痛痒を感じないものゝ如く、其の物悽（ママ）い運動をつゞけて息まない。永遠から永遠に無限大の翔を廣げた大怪物は、社會の風潮や時代の興廢には更に無頓着であるやうに見える〉と、当代の時代状況がまとめられ、筑水自身の人生観が続けられる。

綴られる一連の人生観は、〈靈肉をつゝみ、美醜をつゝみ、あらゆる罪惡と奇蹟とをつゝんだ生活の彼岸には、人間に知られない恐ろしい無底の深淵が有る。すべてが此の淵の中に沈んでしまふ。けれども其れが生活で、我々は、此の不思議な魔力に引かれて、前へ々々と進まざるを得ない〉、〈一ト通り實生活を經驗して見るとそれが案外平凡で、賤俗で、それだけでは、如何にもあつけなく不滿足なやうに感ぜられる〉、〈すべて平凡だ尋常だ淺薄だ。非常な事は到底我々に望まれない。人間の一生も、考へて見れば、つまらない、絶代の事業だとて、どれほどの事もないと。斯ういふ風に考へてくると、必然そこにレシグネーション（ママ）といふ信仰が湧いてくる〉、〈一方に於て我々は、人間の運命と思ひめぐらして、必至的にレシグネーションの態度と取らざるを得ないと同時に、他方に於て、生活は我々に取つての不可思議な魔力で、如何に藻掻いても苦んでも、結局は此の魔力に對する愛着の念を絶つことが出來ない〉というものである。

この㉑「獨語」は、〈生活に對するレシグネーションと愛着と、理論の上では如何やうに考へられやうとも、實際問題としての調和は、如何にも六つかしい〉ことから、〈今の人の所謂レシグネーションは、果たしてレシグネーションの眞境であるであらうか。我々の所謂平凡生活は、果たして生活の眞境であるであらうか〉という問いかけで閉じられている。

㉑「獨語」と同誌上の㉒「**反動**」には、明治四三（一九一〇）年後半期頃から顕著になった現象として、〈漢學又は漢文學の再興と竝んで、廣く倫理修身教訓等に關する著述乃至論文の廣まつたこと〉、そして〈漢學の再興と訓話の普及とは、根柢に於て同じ脈をたどつてゐるもの〉、〈軟文學とか思想界のアナーキーとか言つたやうな現象に對して、健全なサブスタンシアルな思想文學の普及といふが、其の精神〉で、〈偶然使用された硬教育といふ言葉が、此の間の消息を明らかにしてゐる。すべて此等の現象が、輓近の思想界及文藝界の動搖

波瀾に對する反動である〉ということが指摘されている。

筑水は、〈漢學的思想乃至常識的訓話に、相應の眞理や教訓が有ること〉を認めたうえで、〈然しながら、漢學的思想を以て、今の進んだ思想界を料理しやうとするは餘りに盲目的な業〉であると警鐘を鳴らす。そしてこの文章は、〈今日はもはや、形式一邊の理論や、中途半端な常識的訓話に甘んぜられる時代ではないすべてを根柢から改築しなければならない時代〉であって、〈生活に關する根柢義は常に逸せられて、徒に形式論や皮相論が繰返されることは決して慶すべき現象ではない〉と結ばれている。

㉕「**國民思想の動搖**」は、〈國民思想又は國民精神の動搖といふ聲は、近頃至る處に囂しい。十年前までは、苟にも此の種類の說を口にした者は、直に社會から異端視され、輿論の迫害の的となつて、國民思想の基礎は、さながら磐石の上に据ゑられたかの觀が有つた。然るに、時勢は、急轉直下の勢を以て進行し、國民思想延いては國民道德の基礎に就いて、先づ理論的疑惑を懷く者が現はれ、近頃に至つては、國民思想の動搖又は衰退を力說する者又は悲憤する者次第に多く、甚しきに至つては、國民道德の危機を叫ぶ者さへある〉という當代の時代狀況から書き起こされている。

〈國民思想に關する問題は、單に抽象的に廣い國民に關する問題であるばかりでなく、實は同時に個人の運命に關する具體的な重大問題である〉と指摘したうえで、筑水は、〈國民思想又は國民精神〉の〈精髓は、時代と共に、或は成長し發達し、或は萎縮し退嬰すべきもの〉というように〈動的に解釋〉し、〈明治以前又は明治初年の單純な國民思想の標準が、少しも其の地盤色彩を改めずして、其のまゝ直に今日の複雜な時勢に順應されるとすれば、そはむしろ奇異な現象〉であり、〈時勢が複雜になるにつれて、國民思想がやうやく動的狀態に進むは、むしろ自然の成行き〉であるとしている。

そして、〈國民思想又は國民精神が、斯くの如く動的狀態に進み來つた所以の本來源因を明らかにすること〉が、〈今日の我々に取つては、極めて重大な要務〉であり、その〈動搖の經路を明らかにすること〉が〈目下の急務〉であるとする。

この課題について、〈今日の多數經世家又は先輩の諸說によれば、少なくとも今日の國民的精神の動搖は、ひとへに外國傳來の惡文藝惡思想、就中最近の文藝及思想の傳播に胚胎してゐると觀察されてゐる。最近我國に勃興した新文藝や新思想の拘束禁止が、國民思想の動搖を防禦する第一手段である如く觀察されてゐる〉が、〈文藝や思想が、異常な勢力を振ふは其等が一斑國民の情調に合致して、之れに深い共鳴を與へるから〉で、〈國民精神の動搖は、之れを外的な文藝や思想の影響に歸するよりも、むしろ一斑國民の內的情調の裡に、其の眞源因を發見〉すべきで、〈單に外的な文藝や思想を取締つて、國民精神動搖の眞源因を逸し去る今の經世家の處置は、餘りに皮

相的に餘りに近眼的な業〉であると批判している。

筑水の主張は、〈現代〉は〈一面物的生活の擴張時代であると同時に、他面精神生活の革新といふ大事に遭遇した容易ならない時代〉であるにもかかわらず、〈現在の大勢から言へば、基礎生活のみは、ますます其の地盤範圍を擴張して、肝腎の精神生活の發達は、まだ遠く之れに伴はない觀がある。物質力の範圍はますます擴大されて、精神力は、之れがために甚しく壓迫され萎縮された趣きがある。基礎生活の鞏まつた新代に適すべき新しい強い精神力がまだ發達しないうちに、物質力は、殆どデスポチックな勢力を振つて進んで行く〉という状態にある。そのために、〈近代生活に特有な暗い重くるしい一種の不安懊惱苦悶の現象〉が起こってくるというのである。そして、そもそも〈我々は到底冷酷な物質生活のみには堪へられない、而も我が存在を確實にすべき強い精神力を缺いてゐる。苦まざらんと欲するも能はず、悶へざらんと欲するも能はずといふ現代生活につき纏つてゐる暗影である〉と述べている。

〈美しい尊い強い精神力が次第に凋落して、人間の思想精神が次第に物質化されゝば〉、〈眞の人間生活の本意が沒却されゝば、そこから極端な個人主義も胚胎すれば虚無思想も産まれ〉、〈生産分配の制度が完からず、生活難に苦む者がますます多ければ彼の社會主義が現はれ、權力名譽の移動が不公平であれば、彼の無數の絶望者破壞者が現はれるたぐひ、其等はすべて現代の物質化から流れ出る暗影〉であるというのである。

すなわち、筑水の主張は、このような〈物質生活擴張の時代、知識官能欲望增大の時代〉においては、〈國民精神又は國民思想は、須べからく此等の基礎生活の上に、一層複雜な確實な强堅な地盤を据ゑなければならない〉ということ。そして、〈新に深められ强められた國民精神のまだ確立されないことが、種々複雜な不安疑惑懊惱を産出す根源〉であり、〈今日の一斑精神界の動搖を、單に外來の皮相の何等の根柢もない一時的發作である如く頑信し、ただ威壓たゞ取締たゞ禁止といふやうな手段で、全體を取繕はうとするは、餘りに盲目的な業〉であり、〈今日はもはや斯かる消極的手段にのみ賴るべき安樂な時ではなく、〈あらゆる方面から、新しい强い深い地盤の有る國民精神を築きあげることに、積極的に全力を費さなければならない時〉であり、〈非常な破格な方法を用ひても、一斑精神界に新光明を放たせるやうな研究事業を飽まで積極的に鼓舞奬勵すべき時〉であるというのである。

また、㉙「**神經衰弱**」の冒頭には、ライプチヒ大学でヴントに学んだ、ドイツ出身のハーバード大学心理学・哲学教授＝ミュンスターベルヒ（Hugo Münsterberg 1863～1916）の著作『今日の諸問題』のタイトルが挙げられ、当代のアメリカ文化にたいする彼の見解のなかから、「神經の恐怖」という論文が紹介されている。

筑水によれば、この論文の主張は、〈文明が次第に複雜となり、生存競爭がますま

す激烈な度を加へ、殊にアメリカ國民の如く、新事業新文明の開拓に過度な勞力を費し、一斑社交界はますます多種多樣に發達しつゝある今日、其の裡面の消息として、今や一斑米國民就中其の中流以上は、甚しい神經過敏、神經衰弱、神經疲勞に苦んでゐると、普通に想像されてゐる。神經衰弱が今日の米國民に普通な病的現象であると想像されてゐる。過度な勞役や神經の疲勞からくる病的結果を防ぐため、あらゆる種類の身體の運動法や、醫學的治療法や、其の外田園生活などいふ工風(ママ)が、今日の米國民の輿論でもあり又同時に强烈な要求と成つてゐる。神經衰弱は複雜な文化に避けがたい必至的現象であると考へられてゐる。然しながら深い洞察力を備へた者の眼からみれば、神經衰弱や神經過敏は、必しも今日俄に激增した特殊な現象ではなく、又今日の米國民が普く神經衰弱に陷つてゐるとも考へられない。彼等の所謂神經過敏は眞の神經過敏ではなく、自分で神經衰弱に惱んでゐると勝手に決めてしまつた一種の空想的イリユージョンに過ぎない〉というものである。

続けて、〈今日米國民一斑に流布してゐる神經衰弱又は神經過敏といふ病的現象には、別に重大な理由が有る〉というミュンスターベルヒの見解が紹介される。すなわち、〈一斑國民が注意の集中といふ意力を缺き。(ママ)精神力が極めて散漫に亂雜に徒費されるといふこと、それが第一の重大な理由。更に一斑の社交界が甚しく女性化されてきたといふこと、それが第二の重大な理由〉であり、〈女性の弱々しい氣風や、全體の注意力又は精神力の散漫淺薄であることが、眞實の神經過敏又は衰弱であると誤解されてゐる〉というのである。

ミュンスターベルヒの主張は、〈先づ神經衰弱といふイリユージョンの因つて來たる病根を治療することに全力を注がなければならぬ。然らずんば、淺薄なアメリカニズムの弊風は遂に救ふべからざる度合にまで進むかも知れない〉という警鐘である、と紹介されている。

このアメリカにおける〈神經衰弱〉の流行について触れた筑水は、〈一斑國民の神經狀態は容易に判斷しがたい〉として、日本における〈目下の文藝界及思想界の神經狀態に就いて考へて見たい〉と述べる。筑水の分析によれば、日米を問わず、〈今の文藝家や學者や思想家は、先づ物質的に活きることが出來ない。他の社會に比較して、彼等の物質的生活は、極めてミジメなもの哀れなもの、到底門外漢の察し得ない程度にある〉というのである。さらに、〈啻に物質的報酬に於けるのみでない、彼等が世間から受ける精神的報酬は、更に憐むべきものである。文藝家や學者や思想家は、社會上の階級の中流にさへ數へられないのみか、正當に言へば、むしろ社會階級の中に數へられてゐない。詩人や小說家の評判といふは、役者や藝人の評判と同じく、一種の玩弄物としての評判に過ぎない。學術や文藝が、一國の文化に取つて、如何に重大であるかは殆ど全く理解されてゐない。文學家と成り又は學者と成ることは、一種の

世すて人と成るやうに考へられてゐる。實業政治經濟の目から、文學などは殆ど無に過ぎない。勳爵位階學位其のものが人物より貴い。斯うした世間が、傲然として文學者に學者に對するとき、文藝家や學者は、中心不安の壓迫を感ぜざるを得ない。夏目漱石氏の學位辭退が、巧に此の間の消息を洩らしてゐるではないか〉とされている。

さらに筑水は、〈今の若い文藝家や學者は、世間の先輩、經世家、指導者といふ側から、一種の強い壓迫をうけてゐる〉ので、〈今日我國の文藝が、大體に於て、ロシア風の壓迫の感じに強い調子を帯びてゐる〉のは、〈文藝家が不知不識の間に受けてゐる内面の壓迫が、此の事に與って力あるべきは殆ど疑ひない〉としている。

筑水は再度、〈注意集中の缺乏といふ事が、神經過敏に似て而も其れとは事情を異にする一種の弊風であるといふミュンスターベルヒ氏の意見は、充分傾聽するに價ひする〉と述べ、〈國民は非常に忙しい。多忙といふことが、近代文明の特長にも見える。餘に多忙であるため、深く考へる暇がない、讀書する餘暇がない劃策する餘地が無い、すべてがよい加減のところで、ずんずん運ばれてしまふ〉という〈一斑世間の風潮〉が、〈おのづから文藝界學藝界思想界にも及ばざるを得ない〉として、〈一斑世間は、多忙であるため讀書に興味を持たず、文藝家も學者も、食はんがためには、立派な作や著述にのみ從事しかねて、結果は、今日のやうな輕い斷片的な深みの無い作や著述の流行といふことに成つてゐる。毎月現はれる小説や脚本の數は、必ずしも少なはくはないが、多くはチョット氣がきいてゐるといふたぐひの短篇もので、眞實な意味に於て、内容の充實したものは殆ど少ない。論文や評論の方面に於ても、長いものや、少しこみ入つたものは、全たく世間から顧みられない。手輕な感想とか、思ひつきのよい簡單なものだけが、世間から歡迎される。實際生活に直接の關係がある理科醫科工科の方面は別として、精神科學の方面に於て、眞に重みがある學術的空氣は、まだ我國には缺けてゐる。すべてが斷片的で一時の思ひつきに過ぎない。文藝界や思想界の變遷を見ても、一面に於て進取的といふ美風は備へながら、其の變遷が餘りに煩瑣で餘りに浮薄で、其の間に嚴密な關係もなければ、統一もなくコンセントレーションも無い〉というようなことから、筑水は、〈今の文藝家や學者や思想家〉にむかって、〈一種の孤獨生活〉を勧める。

それは、〈必ずしも社交を斷絶するといふ意味でなく、深く考へ、深く想ひ、充分にコンセントレートし、充分に錬りきたへるだけの餘地を作るといふ意味に於ての孤獨生活〉の勧めである。この〈孤獨生活〉は、〈文藝家や思想家の生命〉である。筑水の見解によれば、〈文藝や思想は孤獨生活の産物〉なのである。

問題の核心を衝いたこの文明評論㉙「神經衰弱」と同誌上の㉚「**外來思想**」には、〈外來思想に對する覺悟〉について述べられている。〈先輩、諸家〉は〈少でも在來の國民思想に違反したものは、一も二もな

く之れを壓抑し禁止しやう〉としていて、〈眞の病的思想や危險思想の壓抑禁止、夫等に對しては我等も異論が無い〉が、〈先づ外來思想其ものゝ本質を充分明瞭に研究する必要が有る。其の起源本質をも明らかにせず、單に從來の國民思想に新奇であるといふ外觀だけで、直に之れを取捨選擇しやうとするは、餘りに近眼的な業ではないか。西歐の現代思想は極めて複雜である。其の複雜な現代思想が、充分邦人に理解されてゐるとは思はれない。其の本質を明らかにせずして、妄に之れを危險視するは、却つて民心に危險な好奇心を起させる所以ではないか〉と警鐘を鳴らす。

さらに、筑水は、〈外來思想に對する世人の大なる誤解は、外來思想又は西洋思想は、直に邦人に深刻な影響を與へる力を以てゐると考へられる一事である〉と述べて、〈元來思想や感情が他に感染するには、感染するだけの素が對手に無くてはならぬ。斯くの如き素地を缺いては、外來の思想や感情は殆ど無力である。西洋思想が邦人に深刻な感化を及ぼすとすれば、夫れは西洋思想が思想として影響を及ぼすにあらずして、邦人が既に斯かる外來思想に感化さるべき素地を備へてゐるからと解釋さるべきではないか〉と、正鵠を射た指摘をしている。

結局、この文章で筑水が主張する〈外來思想に對する用意〉は、〈先づ斯かる思想感情の因つて胚胎し來たる實生活の調査改善が眞つさきの仕事〉であり、〈先づ口に外來思想を唱へる前、默して其の根源を吟味すべき〉であるということである。

さらに、㉜「**文藝院の設置**」における筑水は、かなり痛烈な批判・見解を表明していると言える。〈今度文部省の手で出來あがつた文藝委員會は、其の動機に於ても劃策に於ても、如何にも立派なものであつたとは言はれない〉、〈僅に文部省内二三子の手によつて、而も眞實に我文藝のためといふよりは、むしろ其の以外の動機を交へて、些々たる豫算額によつて、たゞ世間竝の看板を掲げたといふに至つては、世人が最初から嘲弄の態度を以て之れに對しても無理でない。高等教育會とか學士會とかの無能である如く、今回の文藝會が餘り大したものでないことは、今から最早見すいてゐる。就中我等の怪訝に堪へぬは、如何に政府の事業であるからと言つて、今度の文藝委員會は、餘りに官僚的に過ぎ、又餘りに俗吏的に過ぎてゐる〉と批判している。

そして、〈文藝は最も自由なるべきもの〉で、〈自由の無い所に文藝は無い。多少意味の有る文藝院を設立しやうとするには、少なくとも其の文藝院は政府の直接干渉から離れて獨立の體面を維持し眞に文藝のために文藝を議し得る團體でなければならぬ。然るにひとへに文部の役人によつて左右され、又其等の役人によつて自由に左右され得るやうな委員から成立つてゐる會合では、文藝の積極的奬勵などいふ意味が果たしてどこに有るであらうか。一家の見識を持つてゐる人々が、斯かる俗吏あつかひの委員たることを辭退したは、決して無理なことではない。我々はせめて此の點だけでも今

の委員中の氣骨ある二三子によつて計られんことを囑望する〉と結んでいる。

また、⑥⑦「**個人と犠牲**」は、〈今日多少眞面目に自分を考へる人に取つては、個人と犠牲との關係は、最も深い考察を要する疑問の一つであらう。在來の道德は、主として我々に犠牲の一面を教へた。他のために己れを犠牲に供へることが、殆ど一切の道德であつた。之れに反抗して起つたものが、所謂個人本位の生活である〉と始められている。

だが、ここで展開されるのは、漱石が二年後に『私の個人主義』[17]で表明することになる〈自己本位〉の意味ではなく、〈他のためなどいふことは殆ど顧みず、ひとへに自分のため我れのためばかりを計つて行かうとする。ニイチェの所謂奴隷道德に對して、斯かる自己本位の生活が、半面に於て深い意味を持つてゐることは爭はれない〉というものであり、〈普通世間に理解されてゐるやうな所謂個人本位の生活が、果たして我々の眞の生活であるであらうかは、眞に生活其のものを味つて行く者に取つては、深い深い疑問である〉と疑問を呈することである。

〈大なる自己主張は、大なる犠牲を意味する〉とは、〈近代の大なる個人主義者みづからの主張〉である。〈イブセンは、單に、『ブランド』に於て之れを主張したばかりでなく、彼れが作には、隨所に此の暗示が閃めいてゐる。ニイチェの哲學にも其の根柢には、大なる犠牲〉が主張されている。〈我々は自然の性を盡して生活を味ひたい。個人と犠牲と、それが共に我々に取つて自然の生活である。たゞ此の二を如何に調和して行くべきが、現代の人の疑問である〉というように、⑥⑦「個人と犠牲」は現代人の課題を提示して閉じられている。

五、筑水の〈新理想主義〉の展開
——今後の研究課題

本稿では、從来、逍遥門下の早稲田派として括られ、その〈新理想主義〉の具体的内容について言及されることは稀れであった金子筑水の論説について、『太陽』文芸時評欄担当期のものを中心に紹介してきた。明治期の『太陽』で活躍した文人たちにかぎって見ても、筑水は樗牛・嘲風や、早稲田派の抱月・天渓らに比較して、地味な扱いを受けてきたという印象はぬぐえないが、そのドイツ思想・文化受容をとおしての日本文壇批評、自然主義を超克しようとする思想、時代精神・国民文化の実相を洞察する見識は、決して看過されるべきものではないだろう。

長谷川天渓による筑水追悼の文章「特殊な飜譯の意義」(『明治文學』昭12・8)には、〈藝術と藝術家的態度もしくは敏感な鑑賞家としての態度をもつて、奥底まで理解した哲學者としての同氏と對立する人は蓋し稀少であらう〉と記されている。すなわち、筑水ほど、哲学者としての客観的思考、美学者としての繊細な感性、文芸批評家としての正確な分析力を兼ね備えた人物は、たとえ優れた思想家、文学者を輩出した明治期とは言え、稀有であったということ

とを意味しているのであろう。

その筑水が、自然主義隆盛の時代状況のなかで、オイケン哲学の受容をひとつの契機として展開した〈新理想主義〉は、既に引用したように、現代文明・自然主義の超克を提唱するものであり、精神生活の建設を主張するものであった。筑水は、東西の哲学・道徳・宗教・教育・文芸に関する紹介・評論を展開し、文字通り、人生問題を対象とする〈人生観〉の哲学を樹立したと言っても過言ではないだろう。彼は、人生に基礎を置かない純論理的・思弁的思考は、哲学の真髄から迂遠なものであるという思想を繰り返し主張したのである。

すなわち、哲学の真髄を追究する過程で生み出された筑水の〈新理想主義〉は、近代日本がドイツ哲学を中心とする欧米の哲学を摂取・受容することで生じた確執・葛藤から、そして、明治後半期の日本の思想・文芸界を席巻した自然主義運動の渦中から躍り出たものであり、この時代思潮への多大の関心が、さらに集中的に近代日本の精神的風土の現実を凝視させることになったと考えられるのである。

当時の自然主義文学運動の一大拠点が、筑水の出身である早稲田大学文学部。その理論的指導者が、逍遥門下で双璧とされた一年下の抱月であった。早稲田派が巻き起こした自然主義文学運動に、筑水は安易な同調も、また頭からの否定も為したわけではなかったことは、既に見たとおりである。筑水はあくまでも、自然主義をも超克する新しい精神生活の建設、すなわち〈新理想主義〉の正当性を主張したのである。正統早稲田派でありながら、筑水は自然主義文学運動についてはこのようなスタンスをとり、そうであるからこそ、両性問題・生命哲学・文化主義などについても、とらわれない思想を抱き、その見解を表明することができたのだろう。

筑水の〈新理想主義〉展開における検討すべき項目としては、このように両性問題論[18]・生命哲学論などがあり、今後、『太陽』文芸時評欄を退いて以降提唱することになった大正期の〈文化主義〉についても考察を重ね、当時の思潮における筑水の〈新理想主義〉の位相を確認してゆきたいと考えている。

注

(1) 鹿野政直「『太陽』――主として明治期における――」(『思想』No.450一九六一年一二月)

(2) 鈴木正節『博文館「太陽」の研究』(アジア経済研究所 一九七九年五月)

(3) 注(1)一三九頁。

(4) 注(2)二〇頁。

(5) 注(1)一四五頁。

(6) 注(1)一四五～六頁。

(7) 注(1)一四六頁。

(8) 注(2)二一頁。

(9) 注(2)二一頁。

(10) 注(1)一四六頁。

(11) 注(2)二二頁。

(12) 嘲風・姉崎正治によるニーチェ、ヴァーグナー論について触れた拙稿として、次のものがあるので参照されたい。

①「日清・日露両戦役間の日本におけるドイツ思想・文化受容の一面――総合雑誌『太陽』掲載の樗牛・嘲風・鷗外の言説を中心に」（『日本研究』第一五集　平成八年一二月）
②“Geistesgeschichtliche Beziehungen Japan-Deutschland. Eine Auswertung der Zeitschrift Taiyo”（JAPAN-STUDIEN Jahrbuch des Deutschen Instituts für Japanstudien der Philipp-Franz-von-Siebold-Stiftung Band 8 1996）
③「総合雑誌『太陽』における〈大正生命主義〉の萌芽――高山樗牛・姉崎嘲風のドイツ思想・文化受容と日本文明批評」（『岐阜大学教養部研究報告』第三四号　一九九六年九月）
④「樗牛追悼の嘲風評論――日露戦争期『太陽』における〈永遠の生命〉の思想Ⅰ」（『岐阜大学国語国文学』第二四号　一九九七年三月）
⑤「姉崎嘲風の〈戦争〉と〈女性〉――日露戦争期『太陽』における〈永遠の生命〉の思想Ⅱ」（『岐阜大学地域科学部研究報告』第一号　一九九七年三月）
⑥「『太陽』文芸欄主筆期の高山樗牛――個人主義的国家主義から絶対主義的個人主義への必然性」（『日本研究』第一七集　平成一〇年二月）
⑦「総合雑誌『太陽』掲載の高山樗牛と姉崎嘲風の文明評論――二十世紀初年の日本におけるドイツ思想・文化受容の一面とその意義」（『岐阜大学国語国文学』第二五号　一九九八年三月）

(13) 注（12）の拙稿①②③⑥⑦参照。

(14) 金子筑水研究の基本文献として、昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第四二巻（昭和女子大学近代文化研究所　昭50・11）があり、筑水の「著作年表」も掲載されているが、若干の訂正・補足の必要性と本稿の趣旨により、敢えて本文中に一節をもうけ、「『太陽』掲載の筑水の論説一覧」として列挙した。

(15) 鷗外によるホフマンスタール作品の翻訳として、他に、『謎』（大3・5　原題“Ödipus und die Sphinx”）がある。鷗外にとっての〈若きヴィーン派〉訳業の必然性について論じた拙稿「鷗外における〈若きヴィーン派〉翻訳の意義――シュニッツラー、ホーフマンスタール、バールの翻訳作品の考察を通して」（『鷗外』第三七号　一九八五年七月、後、小論集『異郷における森鷗外、その自己像獲得への試み』近代文藝社　一九九三年二月所収）があるので参照されたい。

(16) 森鷗外「予が立場」（『新潮』明42・12）

(17) 夏目漱石「私の個人主義」（『輔仁會雑誌』大4・3）

(18) 関連の拙稿として、「金子筑水の〈両性問題〉論――『太陽』掲載の論説を視座として」（『岐阜大学国語国文学』第二六号　一九九九年三月）があるので参照されたい。

＊総合雑誌『太陽』掲載の文章を引用するにあたって、便宜上、ルビ・圏点等を省略した。また、ゴシックは、本稿の趣旨を明確にするために、林が為したものである。